

PE 音 [ɑ:] の発達過程について

平 郡 秀 信

I. 序論

英語は1400-1800年にかけて生じた大母音推移 (Great Vowel Shift) の結果, 1) ME/a:/ : ME/ai/ (= [ei]), 2) ME/ɛ:/ : ME/e:/ (= [i:]), 3) ME/ɔ:/ : ME/oi/ (= [ou]), 4) ME/εu/ : ME/eu/ (= [(j)u:]) はそれぞれ融合し, [] 内で示された発音になっている。英語史の概説書では, GVS は EModE 期に主として長母音に生じたと説明されている。この現象が長母音に顕著であったことは事実であるが, 正確に言うと, 二重母音, 単母音にも生じている。音声学の見地から, 単母音は調音期間が短いので, 調音期間の長い二重母音, 長母音より変化しにくい¹。しかし, ME/a/ は今日, その音声環境ゆえに,

- 1) ME/a/ = [æ]
- 2) ME/a/ (__ [r] C₀) = [ɑ:]
- 3) ME/a/ (__ [f,s,θ]) = [ɑ:]
- 4) ME/a/ (__ [l] [m,f,v]) = [ɑ:]
- 5) ME/a/ ([w] __) = [ɔ]
- 6) ME/a/ ([w] __ [r] C₀) = [ɔ:]
- 7) ME/a/ ([w] __ [f,s,θ]) = [ɔ:]
- 8) father = [ɑ:]
- 9) water = [ɔ:] となっている。

OE で stane と綴られていたものが ME で stone と綴られれば, これは OE で /a:/ を持っていたものが ME で /ɔ:/ を持つようになったと推察できる。綴字が固定されると, 原則的には, 綴字は古音価推定の資料として価値を失うことになる。しかし, LME 以降, 個人的な書簡や日記等では伝統的な綴字法から逸脱して, 発音通りに綴った綴字がしばしば見出されている。この種の臨時綴字は表音的であった時代の綴字と同じ価値を持っている。個人的な日記等に見出される臨時綴字は Zachrisson, Ekwall, Jespersen, Wyld 等により, 古音価推定法の一つとして利用されてきた

ものであった。しかし、Dobson は臨時綴字に多くの比重を置いていない。臨時綴字の多くは単なる写し間違いか、臨時綴字でなくしてしまう異形が存在するというのがその理由である。臨時綴字が見出されたとしても、その提供者が StE を話しているかどうか、又それがどういう音に基づいているのかも分からない。Paston Letters は第一級の言語資料であり、その中に見出される臨時綴字は当時の発音を推定する資料として広く利用されてきた。しかし、Margaret Paston は East Anglia の出身の婦人であり、その発音に地方方言の数々の特質が指摘されるこれまた問題多き人物である。更に彼女は殆どいつも地方出身の秘書に口述筆記させていたことはよく知られており、Margaret の発音と思われていたものが秘書の域地方言の発音を表したものでないと誰にも断言できないからである。臨時綴字の証拠は正音学者、脚韻の証拠を検算するための補助資料として利用するのが、安全である。本稿では ME/a/ の音声環境を指定し、それぞれの環境の中で、ME/a/ がどの時期に、どの発達過程を経て、PE 音になったかを正音学者、脚韻の証拠を中心に検証する。

II. 本論

2. 1. 臨時綴字の証拠

Wyld (1936³, pp.196-201) は15~16世紀の文書に 1a) ME/a/ を e と綴った臨時綴字、及び 1b) ME/ε/ を a と綴った臨時綴字がしばしば見出されることを根拠にして、15世紀に南部諸州で、16世紀末までには StE においても ME/a/ は [æ] に前母音化されていたと考えている。しかし、Dobson (1968², § 59 Note 2) によると、ME/a/ を e と綴った臨時綴字の内、Paston Letters と Cely Papers からのものの殆どは MSS の誤読である。そして、残りのものは、その臨時綴字の筆者が ME/a/ が [e] になった地方（東中部とケント）の出身者であるか、その臨時綴字には ME/ε/ 異形が並存しているか、又は語中で弱強勢を持つもののいずれかに属するものである。これらは ME/a/[æ] ではなくて、方言形・異形 [ε] 又は [e], 又は弱形 [ə] を表すものであり、StE での前母音化の証拠にはならない。ME/ε/ を a と綴った臨時綴字の場合も、それが見出されるのは ME/ε/ が今日 [a] となっている東・南部地方の出身者 (Margaret Paston [Norfolk], Gregory [Suffolk], Machyn [Yorkshire], Elyot [Southwest]) の文書に限られており、これらも方言形を表すものと見なすべきで StE での前母音化の証拠にはならない。これらの臨時綴字の証拠は Dobson (1968², § 59 Note 2) では全面的に斥けられている。bend (band), hendes (hands) のような臨時綴字は ME/a/ が [æ] になったことの何の証拠にもならない。何故なら英語を習い始めた子供で、[kæɪt] を ket と綴る子供は一人もいないからである。では、bend のような臨時綴字は何を物語るものかといえば、もし間違いのないものとすれば、それはその人の属していた地域・階級方言では、ME/a/ は [e] になったというのである。事実、そういう臨時綴字が見出される人の属していた地域方言を

調べてみると、ME/a/ は [e] で発音されているというのが Dobson の反論のあらましである。

2) Wyld は15~18世紀の文書に a) ME/ɔ/ を a と綴った臨時綴字、及び b) ME/a/ を o と綴った臨時綴字が見出されることを根拠にして、ME/ɔ/ の平唇化した ME/a/ 異形は本来西部方言訛りであったものが、16~17世紀の StE に入り込み、いわば一種の流行音として、かなり行われていたと考えている。尚、この発音は PE でも南西・南西中部方言の日常会話においても見られる現象である。しかし、Dobson (1968², § 87) によると、正音学者の ME/a/ と ME/ɔ/ の同一視はせいぜい不注意な発音を記した同音語表に見られるぐらいで、それ以外は卑語・方言に依存している Bullokar の脚韻、北部人 Poole の脚韻表 (barb : orb, arch : torch) に散見されるに過ぎない。

3) Wyld (1936³, pp. 232-4) は15世紀の中頃から見出されている ME/u/ を a と綴った臨時綴字が見出されることを根拠に、16世紀の末までに ME/u/ は今日のそれと余り変わらない発音 = [ɹ] に、ME/a/ = [æ] になっていたと考えている。しかし、Dobson (1968², § 97 Note 7) によると、Wyld の挙げている臨時綴字の殆どは、実際には、a ではなくて、o と綴られているものであり、ME/u/ を o と綴っている人は ME/u/ が o に下げられた地方出身者である。又、残りの臨時綴字の中にも、真正なものはなく、warsse (worse) は ME werse (wurse でなく) を表すものである。apon (upon) という綴字は、先ず間違いなく、強勢の欠如と無強勢の ME/a/ と ME/u/ の [ə] への縮小に基づくものである。つまり、StE の ME/u/ を a と綴ったものでなく、ME/a/ の音価を推定する証拠には利用できないことになる。

4) Kökeritz は Shakespeare に次の臨時綴字が見出されることを報告している。

made(mad)(S 129.9), sate(sat)(AYL 2.7. 115), vaste(vast)(TmA 4.3.4409)

しかし、これらは OSL² (ME/a/ が開音節で長母音化し、ME/a:/ になったこと) によるものである。更に ME 期の形容詞の屈折語尾は -e だったので、mad+e となり形容詞は # VCe# を満たし、ME/a:/ 異形が存在したことになる。

2. 2. 正音学者の陳述

Dobson (1968², § 59) によると、ME/a/ は16~17世紀には二つの発音 [a], [æ] が存在していた。前者は1650年まで一般的な発音であり、後者は16世紀では卑俗ないしは平俗であったが、17世紀の前半に次第に広く受け入れられるようになり、1670年頃までには注意深い話し手によって、一般に受け入れられるようになった。ME/a/ は [f, s, θ] の前では長母音化を起したが、この長母音化についての正音学者の証拠は Cooper 以前には見出されない。Dobson (1968², § 50) はこの事実を ME/a/ の [æ] への変化が StE で生じたのは17世紀後半であるとする根拠の一つに利用している。彼は [f, s, θ] の前の ME/a/ の長母音化を、自由位置の ME/a/ が [a] から [æ] へ高母音化したとき、無声摩擦音の前の ME/a/ は ME の音価のまま残り、この [a] が [a:] を経て、更に今日の [a:] へ後退したと想定している。もし ME/a/ の長母音化についての Dobson のこの見解が

正しければ、長母音化の証拠は、自由位置の ME/a/ が [æ] に発達したことの間接証拠となる。17世紀後半に [f, s, θ] の前の ME/a/ に長母音化の証拠が存在することは自由位置の ME/a/ も17世紀後半に [a] > [æ] に変化したことの間接証拠となる。Wolfe (1972, p. 51) によると、ME/a/ = [æ] の最初の証拠を提示しているのは Robinson (1617) であり、Cercignani (1981, p. 86) によると、Cooper (1685) となっている。

2. 3. 脚韻

Kökeritz は Shakespeare に散見される ME/a/ : ME/ε/ を根拠に、16世紀の末までに、StE においても ME/a/ は [æ] になっていたと想定している。Horn (1908, § 40), Wyld (1936³, p.199) でも、ME/a/ : ME/ε/ が ME/a/ の [æ] への前母音化の証拠に利用されている。しかし、それらは [æ] : [ε] 又は [e] の不完全韻ではなく、詩人が属していた方言で [ε] 又は [e] に依存する完全韻である可能性が高い。従って、ME/a/ : ME/ε/ も StE での ME/a/ の [æ] への前母音化の確証にはならない。

2. 3. 1. ME/a/ : ME/ε/

ban : †then(2t), began : †then, began : †whan, can : †then(2t), can : †whan, *kest : best, *kest : rest, man : †then(3t), man : †whan, †than : †whan(Wyatt), had : †lad, *kest : rest, *kest : west, sad : †lad(Spenser1), bad : †bestad, had : †bestad, had : †lad, mad : †bestad, mad : †lad, plesh : flesh, plesh : flesh, sad : †lad(Spenser2), bad : †bestad, clad : †lad, flex : sex, had : †bestad, *ketch : fetch, mad : †bestad, sad : †lad, *thresh : flesh, *thresh : fresh, *wex : sex(Spenser3), glad : †lad, had : †lad(2t), sad : †lad, *wex : annex, *wex : sex, *wext : annex, *wext : next(Spenser4), gan : †than, had : †lad(Spenser5), bad : †lad, had : †lad, *kest : chest, *kest : drest, sad : †lad(Spenser6), action : affection(Raleigh), can : *when(Sidney), man : *then(Lyly), *back : †wreck(3t), began : †then, crack : check, had : †led, lack : †wreck(3t), match : fetch, sad : †led(Daniel), gather : †together(Drayton), man : †then, man : †when(Donne), *back : neck, scratch : †wretch(Shakespeare), clad : bred, clad : fed(Stirling), gather : †together(P. Fletcher), ample : temple, gallow : fellow, hatch : †wretch(Drummond), apparant : †errant(Ford), *gather : whether(Brown), action : perfection(2t), action : perfection(Herbert), snatch : *ketch(Chalkhill), detract : affect, detract : respect(Habington), hand : bend(Bosworth), passion : impression(Godolphin), passion : digression(Cartwright), *catch-them : fetch-them, hat-ched : †wretched, *than : men(Butler), lass : messe, man : †when(Lovelace), began : †then, man : †then(Cowley), *than : pen(Sherburne), *than : men, *than : †when(2t)(Chamberlain), *catch-for't : fetchfor't, *catch for't : stretch for't(Brome), black : deck, clad : bed(2t), clad : led, had : bed, had : wed(2t), master : gesture, sad : wed(Hannay), man : †then(Hall), can-ye : many,

contracted : affected, *than : men(Cotton), ass : dress, *back : †wreck, black : wreck(Dryden1), *back'd : neck'd(Dryden2), band : defend, hand : defend, land : defend, stand : defend(Sprat), hand : comprehend, that : yet(Flatman), *catch : †Wretch(Wilmot), chant : vent(Smith), back : †wreck(Garth), matter : etter(King), bladder : †together, claret : merit, gallow : fellow(Prior), hand : bend, hand : intend(Granville), *gathering : brethren(Swift), bad : bed, haft : left, Japan : †then(Congreve), bass : bless, rag : beg(Watts), chat : met(Sommerville), gallow : fellow, stand : amend(Hamilton), *gather : feather, *gathers : feathers(Brooke), plann'd : ascent(Armstrong), barren : averring, man : †then(Cambridge), clad : †led(Wilkie), clad : †led(Michkle), glad : bed, passion : oppression (Beattie), had : led, palfrey : belfry(Byron),

ME/a/(__ [f, s]) : ME/ε/

*kest : exprest, *kest : wrest(Spenser2), *ouerkest : opprest, *ouerkest : rest(Spenser3), cast : creast, fast : creast, last : creast(Spenser4), *cast : wrast, fast : wrast(Spenser5), haft : left(Waller), craft : bereft(Denham), glass : dress(Lovelace), last : guessed, last : request, past : behest, past : blest, past : repossest(Hannay), lasting : blessing(Dryden2), last : blest(Walsh), fast : best(Prior), glass : dress, pass : guess(Swift), fast : best(Yalden), glass : press, past : rest(Addison), past : drest (Watts), pass : guess, pass : unless, repast : rest(Armstrong), blast : vest(2t)(Smollett), last : opprest(Beattie),

ME/a/(=rather,[__n]C,(C=[d, s])) : ME/ε/

rather : †together(Drayton), rather : †together(Suckling), chance : offence, trance : sense (Hannay), command : end(Cotton), chance : sense(Dryden1), stanch : French(Prior), dance : offence, dance : sense(2t), France : sense(Granville), answer : men-Sir, rather : †together(Swift), rather : †together(Churchill), rather : †tgether(Byron),

ME/a/([w]__) : ME/ε/

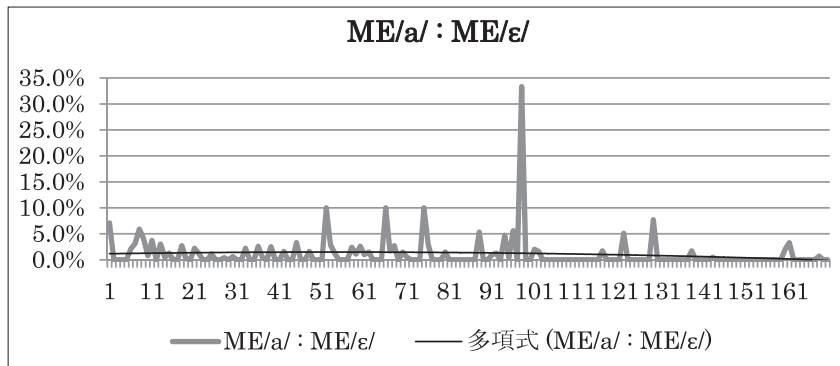
quarrell : perill(Drayton), warrant : †errant(Ford), quarrel : peril, warrant : †errant(3t), watch : †wretch(Butler), wassail : vessel(Brome), want : content(Hannay), warrant : †errant(King), warrant : †errand, warrant : †errant, warrant : †errand, watches : fetches(Prior), want : repent(Dodsley), swallow : †yellow(Armstrong), wand : attend(J. Warton),

ME/a/([w]__) : ME/ε/

walles : tells(Drummond),

EModE 期以降、ME/a/ は ME/ε/ と押韻しているが、ME/a/ : ME/ε/ が時代と共にどのように変化してきたかを見るために ME/a/ : ME/ε/ の押韻率をグラフにすると、以下ようになる (平郡, 2012)。

折線グラフ1 ME/a/ : ME/ε/ の押韻率の推移



ME/a/ : ME/ε/ はPE では [æ] : [ε] の不完全韻であるが、EModE 期以降散見されるものの、LModE 期には極めて稀である。ME/a/ : ME/ε/ はある時期が過ぎると多く見出されるというのではなく、特に Scotland・北・西部出身者に多く見られるというのが特色になっている。ME/a/ と ME/ε/ の脚韻は全部で158例見出されているが、1650年以前では129例 (81.6%)、1650年以降では29例 (18.3%) 見出され、その殆どが StE で ME/a/ が [æ] に高母音化されていないと思われる時期に ME/a/ と ME/ε/ との脚韻が見出されていることになる。1650年以前の詩人で ME/a/ と ME/ε/ の脚韻が Wyatt(Kent[14]), Spenser[38], Raleigh(Devonshire[1]), Sidney(Kent[1]), Lyly(Kent[1]), Chapman(Hertfordshire[3]), Drayton(Warwickshire[1]), Daniel(Somerset[11]), Shakespeare[4], Done(London [2]), Stirling(Scotland[2]), P. Fletcher(Norfolk[1]), Drummond(Scotland[3]), G. Fletcher(Suffolk[1]), Brown(Devonshire[1]), Herbert(Wiltshire[3]), Chalkhall(?[1]), Boswerth(Cambridge[1]), Godolfin(Coewall[1]), Cartwright(Gloucestershire[1]), Butler(Worcestershire[3]), Habington(Worcestershire[2]), Lovelace(Kent[2]), Cowley(London[2]), Sherburne(Essex[1]), Chamberlayne(Dorsetshire[3]), Brome(?[2]), Hannay(Scotland[9]), Hall(Durham[1]), Cotton(Stafford[3]), Dryden(Northamptonshire[4]), Sprat (Devonshire[4]), Flatman(London[2]) に [] 内で示された数だけ見出され、1650年以降の詩人で ME/a/ : ME/ε/ が Rochester(Oxfordshire[1]), Garth(Yorkshire[1]), King(London[1]), Prior (Dorsetshire[3]), Granville(Devonshire[2]), Swift(Dublin[1]), Congreve(Yorkshire[3]), Smith(Worcestershire [1]), Watts(Southamptonshire[2]), Smith(Worcestershire[1]), Somerville(Gloucestershire[1]), Thomson(Scotland[1]), Hamilton(Scotland[2]), Armstrong(Scotland[1]), Cambridge(London[2]), Wilkie(Scotland[1]), Goldsmith(Ireland[1]), Mickle(Scotland[1]), Beattie(Scotland[2]), Byron(London[2]) で見出されている。ME/a/ : ME/ε/ が見出される詩人では同時に ME/ε/ : ME/a/ も見出され、ME/a/=ME/ε/=ME/a/=[e] であるという事実が浮上してきた。Dobson (1968², § 59 Notes 2, 3, § 70) によると、

I] ME/a/ を持つ語にはいろいろな起源に遡る ME/ɛ/ 異形が並存しており、少なくとも、EModE 期には次の諸語に ME/ɛ/ 異形が並存していた。

a) adder, catch, fathom, mass, sadness, than, Thanet, wash には OE/a/, OE/ea/ に由来する ME/ɛ/ 異形が並存していた。

b) OED によると thrash にも ME/ɛ/ 異形が並存していた。thrash は ME 期に thrash, thresh の二つの異形が並存しており、歴史的には thresh の方が古い形だが、15世紀に方言形の thrash が16世紀末に文語に入り、17世紀に「打ち砕く」の意味で確立した語である。更に、

c) Wright (1905, § 23) によると、after は Lincolnshire, cap は Scotland, Devonshirer, Kent, cat は Kent で [e] と発音されることが示されている。

d) Cercignani (1981, p.100) によると、back, father にも ME/ɛ/ 異形 (< Mercian, Kentish ME/ɛ/) が並存していた。

従って、ME/a/ : ME/ɛ/ の内、I] の諸語と ME/ɛ/ との脚韻は ME/ɛ/ に依存するものかも知れない (* 印を付す)。

e) bachelor, charity, January, jasper, gallon, rank, satisfy, salaly, tragedy には OF/e/ に由来する ME 異形が並存していた (Dobson, 1968², § 59 Notes 2, 3)。

II] Dobson (1968², § 59 Notes 2, 3, § 70, § 87) によると、次の ME/ɛ/ を持つ語には、少なくとも、E ModE 期には ME/a/ 異形が並存していた。

a) EModE 期に any (< OE ænig) には OE/a:/ が LOE に OE/a/ への短母音化に由来する ME/a/ 異形が並存していた。many にも any の類推で ME/a/ 異形が並存していた。

b) check, together にも ME/a/ 異形が並存していた。

c) yellow は北部方言で ME/a/ 異形 (4-6 yalow) が並存していた。

d) Kökeritz (1953, p.185) によると、次の諸語にも、少なくとも EModE 期には ME/a/ 異形 (= 二重語) が並存していた : embassy, errand, melancholy, wreck, wrestler, wretch。

e) OED は led, then, when に ME/a/ 異形が並存していたことを示している。then は元は than と同一語であり、ME に二つの異形 thanne, thenne が並存しており、分化は1700年頃に確立した語である。when も ME に二つの異形 whanne (< OE hwanne), whenne (< OE hwenne) が並存していた。従って、ME/a/ : ME/ɛ/ の内、II] の諸語と ME/a/ との脚韻は ME/a/ 同士の脚韻であるかも知れない († を付す)。およそどの国の首都でもその住民の相当数は地方住民によって占められており、首都では色んな方言が飛び交っていたはずである。EModE 期のロンドンは今以上に各地の方言が入り乱れており、詩人に見出される ME/a/ と ME/ɛ/ の脚韻が1個や2個の場合には、ME/a/ がいち早く前母音化した方言の発音に依存させたものと見るのが妥当であろう。1650年以前に見出される ME/a/ と ME/ɛ/ の脚韻はその殆どが異形に依存するものであり、特に北部・Scotland・Kent 出身者にあってはその傾向が強い。押韻率も極めて低く、適切な押韻語がない

場合に、異形による発音を利用しているという程度のものである。異形に依存しない ME/a/ と ME/ɛ/ の脚韻が初めて Herbert に見出されている。彼は Cambridge を卒業するが、Salisbury 近くの Bemerton 村の牧師として余生を送っているので、彼のものも確証にはならない。1650年以降の詩人でも ME/a/ と ME/ɛ/ の脚韻が見出されるが、ME/a/ と ME/ɛ/ の脚韻の相対的頻度は1650年以前とは逆で、低くなっている。これは1650年以降になると、ME/a/= [æ], ME/ɛ/= [e] が確立し、両者の母音の開きが大きくなり、詩人は両者を押韻させるのを躊躇したためである。筆者は ME/a/ : ME/ɛ/ は [æ] : [ɛ] の類韻ではなく、ME/a/ の方言形・異形 [ɛ] 又は [e] に依存する完全韻であると想定している。ME/a/ と ME/ɛ/ の発達過程の相関関係は次のようなものであろう。

ME/a/ と ME/ɛ/ の発達過程の相関関係

	1550	1600	1650	1700
ME/a/= [a]	[a]	[a] > [æ]	[æ]	[æ]
ME/ɛ/= [ɛ]	[ɛ]	[ɛ]	[e]	[e]

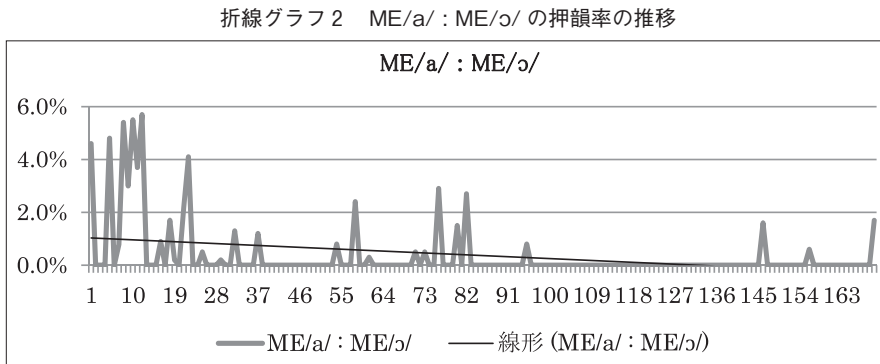
2. 3. 2. ME/a/ : ME/ɔ/

*bronds : fonds, can : an, *honds : fonds, *lond : bond, *man : an, *stond : bond, than : an, that : not(2t)(Wyatt), arrowe : sorrowe, *honde : fonde(Spenser: Sc), banner : dishonor, banner : honor, banner : vpon-her, batt : hott, bat : lott, *hond : cond, *sprong : long, *sprong : song(Spenser : Minor), *hond : yond, *began : gon(Spenser2), *hand : fond, *hond : fond, *hond : pond, *hond : yond, *Strond : pond, *strond : yond, that : †gat, *vnderstond : pond, *with-stond : fond(2t) (Spenser3), *dallie : follie, *dallie : iollie, *hond : bond, *lond : bond, *stond : bond, *withstond : bond(Spenser4), *bond : fond, *hand : band, *hond : beyond, *hond : fond, *rong : alone, *rong : throng, *song : along, *song : throng, *stand : band, *stond : beyond, *strond : fond, *withstand : band, *withstond : bond(Spenser5), baner : dishonor, baner : on-her, *hand : band, maner : dishonor, maner : on-her(Spenser6), *forbod : †god, *forbodd : odd(Warner), *land : beyond, *man : thereon, *stand : beyond(3t), that : †gat, *understand : beyond(Daniel), halow : follow(Drayton), *dally : folly, *hallow : follow(Shakespeare), am : †Tom, crab : †bob, *dally : folly, *hallow : follow, *man : on(2t), pap : †hop(Shakespeare), that : not(Donne), addle : noddle(Corbet), arrow : sorrow(F. Beaumont), *hallow'd : follow'd, *land : beyond, *lond : fond(Brown), narrow : sorow , marry : for-ye(Butler), narrow : sorrow, wrapped : dropped(Lovelace), *strond : beyond(Chamberlain), Addle : Noddle(Dryden2), *began : on(Dryden4), happy : copy(Flatman), ran : on (Wilmot), that : †got(Otway), *man : anon(Swift), lass : †cross(Smart), *hallo' : follow(Cowper), *bland : beyond, *hand : beyond, what : sot(Keats),

ME/a/(__ [f]) : ME/ɔ/

laugh : thereof(Bosworth), laugh'd : scoff'd(Phillips), laugh : off(Flatman), grass : moss(Addison), laugh : off(Dodsley).

EModE期以降, ME/a/ はME/ɔ/ と押韻しているが, ME/a/ : ME/ɔ/ が時代と共にどのように変化してきたかを見るために ME/a/ : ME/ɔ/ の押韻率グラフにすると, 以下のようになる(平郡, 2011)。



ME/a/ : ME/ɔ/ は PE では ME/a/=[æ] : ME/ɔ/=[ɔ] となり不完全韻であるが, EModE 期以降, 散見されている。ME/a/ と ME/ɔ/ の脚韻は全部で99例見出されているが, 1650年以前では89例(90%), 1650年以降では10例(10%)見出され, その殆どが ME/a/ が [a] であったと思われる時期に ME/a/ と ME/ɔ/ との脚韻が見出されていることになる。1650年以前の詩人で ME/a/ と ME/ɔ/ の脚韻が Wyatt(Kent[9]), Spenser[46], Warner(Oxfordshire[2]), Daniel(Somerset[7]), Drayton(Warwickshire[1]), Shakespeare[7], Donne(London[1]), Corbet(Surrey[1]), F. Beaumont(Leicestershire[1]), Browne(Devonshire[3]), Bosworth(Cambridge[1]), Butler(Worcestershire[2]), Lovelace(Kent[2]), Chamberlain(Dorsetshire[1]), Phillips(London[1]), Dryden(Northamptonshire[2]), Flatman(London[2]) で [] 内の数字で示された数だけ見出され, 1650年以降の詩人で ME/a/ と ME/ɔ/ の脚韻が Swift(Dublin[1]), Wilmot(Oxfordshire[1]), Otway(Sussex[1]), Addison(Wiltshire[1]), Dodsley(Nottinghamshire[1]), Smart(Kent[1]), Cowper(Hertfordshire[1]), Keats(London[3]) に見出されているに過ぎない。ME/a/ と ME/ɔ/ の脚韻は EModE 期に集中しており, 特に北・西・南部出身者に多く見られるというのが特色になっている。筆者は1650年頃 ME/a/=[æ], ME/ɔ/=[ɔ] が確立したと想定しているので, 17世紀後半のものは伝統的脚韻である公算が大である。Dobson (1968², § 71) によると,

I] a) -nd, ng の前の ME/a/ には, LOE/a:/>ɔ:/>ɔ/ の過程を経た ME/ɔ/ が並存し, 少なくとも, EModE 期には band, brand, hand, hang, stand, stamp に ME/ɔ/ 異形が並存していた。

b) OED は bid, ring, sing, spring の過去形には ME/ɔ/ 異形 (bod 6-7, rond 3-6, song 4-7, sprong 4-7) が並存していたことを示している。しかも, hand, land 等は今日 Warwickshire では [ɔ] と発音されていること考えれば, ME/a/ : ME/ɔ/ は [ɔ] に依存する完全韻である蓋然性が高くなる

(ME/a/ の ME/ɔ/ 異形に依存するものには * 印を付す)。

c) Kökeritz (1953, pp.165-6) によれば、鼻音の前の thank, man と dally にも、又、少なくとも、EModE 期には chap, hallow, tadpole, tassel, tatter にも ME/ɔ/ を持つ二重語が並存していた。従って、I] の諸語と ME/ɔ/ の脚韻は ME/ɔ/ 同士のものかも知れない。

II] ME/ɔ/ は StE では無変化のまま保持されたが、EModE 期のある一時期、[ɔ] > [a] が西・南西部・南部・ロンドン近郊の諸方言、更にはロンドン英語にも生起した。EModE 期にはこの方言形が StE に入り、16-7世紀には一種の流行音としてかなり広く行われていた。この ME/a/ 異形は StE ではその後廃用に帰したが、plot, strop には ME/a/ 異形が並存していた。この種の発音は既に The Life of St. Editha (1420) という Wiltshire の詩に見られる。この詩では storm の代わりに starm が用いられており、この種の発音は現在でも南西・南西中部方言の日常会話に普通に見られるものである。Kökeritz (1953, p.224) によれば、bob, doffed, folly, hop, Tom には方言に由来する ME/a/ 異形が並存し、又、Wright (1905, § §82-3) によると、cross は Kent, Devon, Dorset で、crop は Devon, Dorset で、clot は Devon で [a] と発音されていることが示されている。OED によると、drop, got, hot, on には ME/a/ 異形 (5 drap, 3- gat, 2-4 hat, 1-5 an) が並存していたことが示されている。従って、II] の諸語と ME/a/ の脚韻は ME/a/ 同士のものかも知れない。ME/ɔ/ の ME/a/ 異形に依存するものには † 印を付す。ME/ɔ/ の ME/a/ 異形に依存する ME/a/ : ME/ɔ/ の数は少ないけれど、これらの脚韻が Spenser, Shakespeare, Donne, Dryden という著名な詩人の作品の中に見出されている。このことはこれらの脚韻が完全韻であり、当時一般に行われていた発音が忠実に脚韻の中に反映されているという点で注目し値する。Dobson (1968², § 87) によると、正音学者の ME/ɔ/ と ME/a/ の同一視の証拠はしばしば不注意な言葉を記述した同音語表に見られるぐらいで、教育のある人々の言葉では生じていない。ME/a/ : ME/ɔ/ は ME/a/ の ME/ɔ/ 異形か、ME/ɔ/ の ME/a/ 異形に依存するかのどちらかであり、何れにしても完全韻である。ME/a/ (__ [f]) : ME/ɔ/ は laugh の ME/au/ > ME/a/ > ME/ɔ/ 異形 (loff 6) に依存するものである。laugh の PE [a:] は ME/au/ が [x] > [f] の後で、15-6世紀に短母音化され、17世紀に無声摩擦音の前で長母音化されたことに由来する。Shakespeare (MND 2. 1. 55) には laugh の過去形 loff 異形が見られる。grass : moss も多分 moss の方言での ME/ɔ/ > ME/a/ 異形に依存するものであろう。

2. 3. 3. ME/a/ : ME/u/

fantome : custume(Wyatt), banished : punished, begonne : shonne, sponne : shonne(Spenser: Minor), aspect : suspect, begonne : ronne, begonne : shonne(2t)(Spenser3), banke : stanke, begune : sonne, man : ouerran, ranke : stanke(2t), sponne : begonne, sponne : ronne(Spenser4), begone : ouerronne(Spenser5), begonne : shonne(Spenser6), adder : shudder(Shakespeare), beganne : Sunne(Campion), ran : shun, ran : son(G.Fletcher), began : son, began : spun(Benlowes), man : begun(Suckling), baron : murain, disparage : courage, marriage : courage(Butler), began :

sun(Chamberlain), hang'um : among'em(Brome), can : Sun(Vaughan), span : begun(Dryden2), began : son(Prior), man : begun(Tickel),

ME/a/ : ME/o:/>ME/u/

begonne : donne(Spenser : Sc), gather : other, begonne : vndone, sponne : vndone(Spenser : Minor), began : wan, can : wan, man : wan(2t), ran : wan(Spenser2), begon : won, begonne : wonne(2t)(Spenser3), begonne : fordonne, begonne : wonne, begun : wun(Spenser5), begonne : wonne (Spenser6), man : one(F. Beaumont), man : done(Suckling), man : won(Dryden4), dance : once(Lloyd),

ME/a/ : ME/u/ は PE では [a] : [ʌ] となり不完全韻である。今回の調査で、ME/a/ : ME/u/ は EModE 期以降、僅か33例しか見出されていない。1650年以前の詩人で ME/a/ と ME/u/ の脚韻が Wyatt(Kent[1]), Spenser[16], Shakespeare[1], Campion(?[1]), Suckling([1]), G. Fletcher(?[2]), Benlowes([2]), Butler([3]), Chamberlayne[1]), Brome(?[1]), Vaugham([1]), Dryden ([1]) に [] 内で示された数だけ見出されているが、その半数は北部方言の発音にその脚韻を依存させていると思われる Spenser からのものである。1650年以降の詩人では ME/a/ と ME/u/ の脚韻が Prior, Tickel に 1 例づつ見出されているに過ぎない。ME/a/ が [a] であり、ME/u/ が [u] である間は両者は韻を踏まない。しかし、1650年以降 ME/a/ が [æ] になり、ME/u/ が [ʌ] になれば、両者は類韻を踏む可能性が出てくる。Dobson (1968², § 97) によると、ME/a/ と ME/u/ の同一視は稀で方言で見られる現象であり、正音学者は誰も明確に ME/a/ と ME/u/ の同一視を示しておらず、Bullakar の脚韻 (last : must) と Coles の Eng.-Lat. Dict. の中での master と muster の対に見られるにすぎない。Shakespeare に adder : shudder が見出されるが、Kökeritz (1953, p. 241) はこれを ME/a/= [æ] : ME/u/= [ʌ] の類韻と見なし、ME/a/ が [æ] に高母音化し、ME/u/ が [ʌ] に中舌化した証拠と見なししている。しかし、この脚韻も shudder に shadyr 異形が並存しており、確証にはならない。更に、shudder には shodar 異形が並存していたので、ME/o/ の方言音の ME/a/ 異形に依存するものと解することも可能である。

2. 3. 4. ME/a/ : ME/i/

gether : hether(Spenser : Sc), geather : thether(Spenser : Minor), gather : thither(2t)(Drayton), Spenser の脚韻が示しているように gather には ME/ɛ/ 異形 (3-5 gether) が並存していたので、Spenser からのものは e に依存する視脚韻である。Kökeritz (1953, p.187) によると、hither, thither には ME/ɛ/ 異形が並存していた。従って、ME/a/ : ME/i/ は gather の ME/ɛ/ 異形と hither, thither の ME/ɛ/ 異形に依存する完全韻となる。

2. 3. 5. ME/a/ : ME/a:/ 用例多数にて Shakespeare までの具体例を挙げるに留める (ME/a/ : ME/a/ で入力)。

alteration : fashion, apace : hase, apase : alas, becam : am, blame : ame, cace : alas, case : alas(4t),

vase : alase, craue : †haue(2t), *crave : †have(9t), dam : am, fable : saddel, face : alas, fade : badd, fade : †glad, fade : †madde, *gate : †fat, grace : alas, grace : alase, *grave : †have(2t), hate : that, lade : hade, lame : ame, made : †glad, mak : lakk(2t), operation : fashion, pace : alas, place : hase (2t), rave : †have, saue : haue, save : †have(3t), *shade : hade, shame : ame, slave : †have(2t), space : alas, spas : Alas, state : †fat, tame : ame, tast : hast, trace : alas(2t), wast : hast(Wyatt), came : am, came : lambe, craue : haue, dame : ame, graue : haue, haste : hast, occasion : passion, plate : sate, sam : dam, sam : lam, same : ame, scath : hath, shame : am, waue : haue(Spenser-1), bathe : hath, came : am(2t), *crave : †have(4t), craving : having, danger : anger, deprave : †have, endanger : anger, estimation : passion, forsake : wrack, frame : am, game : am, *gave : †have(2t), *grave : †have(5t), hate : sate, knave : †have(2t), lamentation : passion, late : sate, mate : sate, plac't : hast, plast : hast, rathe : hath, save : †have(11t), slave : †have(6t), state : sate(2t)(Sidney), cave : †have, *crave : †have(10t), creation : fashion, deprave : †have(3t), estate : sate, estimation : fashion, fame : am, fate : sate, favour : †have-her, *gave : †have(6t), *grave : †have(5t), incantation : passion, nam'd : damn'd, nation : fashion(2t), nation : fashion, nature : stature(2t), save : †have(3t), station : pasion, unstable : bable, wanne : began, wave : †have(Drayton), chamber : amber, *crave : †have, face : has, *gave : †have, *grapes : mishaps, *grave : †have (6t), *grave-it : †have-it, place : ass, *shade : †sad, slave : †have(4t)(Shakespeare),

PE では ME/a/ : ME/a:/ = [æ] : [ei] の不完全韻であるが, EModE 期以降どの詩人にも豊富に見出されている。これらは ME/a/ の ME/a/ 異形か, ME/a/ の ME/a:/ 異形に依存するかのどちらかであり, 何れにしても完全韻である。

I] Dobson (1968², § 62) によると, 1) 鼻音の前の ME/a/ を持つフランス語借用語には ME/au/ 異形が並存し, StE ではこの ME/au/ 異形が定着したが, この ME/au/ 異形は LME までに ME/a:/ に発達した。しかし, 次の語には本来の ME/a/ も異形として, 並存していた: ancient, angel, chamber, change, range, stranger.

2) Dobson(1968², § 6)によると, ME/a/ は開音節では長母音化して ME/a:/ となったが, EModE にはこの長母音化を免れた ME/a/ 異形が次の諸語に並存していた: able, ace, aged, cage, chaste, dame, fable, favour, gage, grace, haste, James, labour, lace, mace, matron, misplace, nature, page, raging, sacred, savour, taste, waist, waste.

3) Dobson (1968², § 25) によると, behave, crave, gave, grave には短母音化による ME/a/ 異形が並存していた。但し, これは StE ではなく北・東部方言に固有の現象である。

4) Kökeritz (1953, p.165) によると, 次の語にも ME/a/ 異形が並存していた: gate, grape, shade。従って, ME/a/ : ME/a:/ の内, I] の諸語との脚韻は ME/a/ に依存する完全韻であるかも知れない。ME/a:/ の ME/a/ 異形に依存するものには * を付す。

II] Dobson (1968², § 6) によると, 1) ME/a/ は開音節では長母音化して ME/a:/ となったが, 今日この長母音化を免れて ME/a/ を持つ語の内, any, fat, father, majesty, master, rather には ME/a:/ 異形が並存していた。

2) Kökeritz (1953, pp.164-5) によると, 次の ME/a/ を持つ語にも EModE 期には ME/a:/ 異形が並存していた: glad, mad, sad, small.

3) Dobson (1968², § 4) によると, have には強形の ME/a:/ 異形が並存していた。

ME/a/ : ME/a:/ の内, II] の諸語との脚韻は ME/a:/ に依存する完全韻であるかも知れない。ME/a/ の ME/a:/ 異形に依存するものには † を付す。

2. 3. 6. ME/a/ : ME/ɛ:/

fashion : †reason, passion : †season(Wyatt), *haue : sheaue(Spenser : Sc), stature : creature, stature : creature, stature : feature(Spenser : Minor), *haue : receaue(Spenser2), stature : creature, stature : feature, *haue : leaue, *haue : reaue(Spenser4), *haue : leaue(Spenser5), *haue : leaue(Spenser6), *have : receive(Southwell), *have : conceive(5t), *haue : deceaue, *have : deceive, *have : deceive(3t), *have : leave(13t), *have : reave(4t), *haue : receaue, *have : receive, *haue : receiue, *have : receive(10t), backe : wreake, lacke : wreake(Stirling), *have : deceive, *have : leave, *have : receive(Drummond), stature : feature(Chalkhill), *have : leave (Bosworth), *have : leave(Butler) *have : bereave, *have-it : conceive-it, stature : feature, *had : plead, *have : receive(Hannay), *have : deceive, hap : leap(Hall), flatter : Creature, matter : Creature, cap : heap(Wilmot), sate : treat(Moore), mass : increase(Addison), *have : receive, axe : speaks(Watts), *have : leave(Young), catch : †reach(Jenyns), sate : †treat(Moore), *have : leave (Cambridge), claret : bear-it(Cawthorn), ME/a/ : ME/ɛ:/ は PE では [æ] : [i:] の不完全韻であるが, 当初想定していた以上に, EModE 以降見出されている。

I] Dobson (1968², § 4) によると, have は, 少なくとも, EModE 期には ME/a:/ 異形が並存していた証拠がある。従って, have と ME/ɛ:/ の脚韻は ME/a/ : ME/ɛ:/ = [e(:)] であるかも知れない (* を付す)。

II] Dobson (1968², § 8) によると, reach, season, treat には ME/ɛ/ 異形が並存していた証拠があるので ME/a/ とこれらの語との脚韻は ME/a/ : ME/ɛ/ であるかも知れない († 印を付す)。

III] Dobson (§ § 115, Notes 3, 7, 127) によると, creature, speak には ME/a:/ 異形が並存していた証拠があるので, ME/a/ と creature, speak の脚韻は ME/a/ : ME/a:/ > 短母音化 > ME/a/ 同士の脚韻となろう。

IV] encrease, feature, heap, leap に ME/ɛ/ 異形が並存していた正音学者の直接的証拠はないが, OED は ME/ɛ/ 異形 (4-5 encesse, 4-6 geture, 3-5 hep, 4-6 lepe) を記録しているので, ME/a/ とこれらの語との脚韻も実際には ME/a/ : ME/ɛ/ であるかも知れない。これらの脚韻が見出されるのは

北部・Scotland・Kent 出身者であること、及びこれらの方言では ME/a:/, ME/ɛ:/ は短母音化されていることを考慮すれば、ME/a:/ ME/ɛ/ は [æ] : [ɛ] 又は [e] の類韻でなくではなく、ME/a/ の方言音・異形 [ɛ] 又は [e] に依存する完全韻であろう。ME/a/ : ME/ɛ:/ が見出される詩人では同時に ME/ɛ/ : ME/a:/, ME/a:/ : ME/ɛ:/ が見出され ME/a/, ME/a:/, ME/ɛ/ は [e] になっていたので、ME/a/ : ME/ɛ:/ は [e] に依存する完全韻である蓋然性が高くなる。

2. 3. 7. ME/a/ : ME/ai/

*have : stain, scant : restraint(Daniel), gat : wait, hath : faith(3t)(Donne), *have : betray, *have : stray(Stirling), *have : way, scanted : painted(P.Fletcher), hath : faith, azure : leisure (Drummond), hath : faith(King), lads : maids(Chalkhill), hath : faith, hath : lay'th, *have : waive, *sat : wait, thereat : wait(Benlowes), land : ordain'd(Milton), at-them : wait-them, bad : obey'd, banns : maintains, famine : maiming, *had : paid, hand : arraign'd, *hath : faith, land : gain'd, atin : beiting, valour : tailor, valours : tailors(Butler), *hath : FAITH(2t)(Crashaw), *hath : faith (Cleveland), *hath : faith(2t)(Denham), hand : gain'd(Lovelace), *hath : faith(Marvell), *hath : faith(5t) (Hannay), can : contain, undestand : gain'd(Hall), pant : fain't, sand : rain'd(Cotton), MAN : plain (Dryden1), man : sustain, pan : strain, plant : saint, *sad : betray'd, *sad : maid (Dryden2), man : train(Dryden3), man : sustain, man : train, *sat : weight(Dryden4), began : pain, began : vain, *sat : aid, *sat : wait(Sprat), damn : claim(Wilmot), *sat : wait(Otway), *hath : faith(Carey), plant : acquaint, plant : paint(Hammond), gland : strain'd, *had : maid(Blackmore), *had : betray'd, hand : gain'd(Duke), cant : faint(Halifax), man : pain(Garth), swans : strains (Walsh), man : wain(King), *am : aim, hand : gain'd, land : sustain'd, man : contain, man : vain, ran : rain, ran : reign, ran : train(Prior), *had : obey'd(Pomfret), can : vain(2t), man : complain, man : reign(Granville), *had : paid, hand : stain'd(Congreve), man : sustain(Yalden), began : pain, began : vain, land : restrain'd, man : retain, pant : faint, ran : plain(2t), ran : train, sand : drain'd(Addison), man : stain(Watts), cant : saint, clad : plaid(Somerville), hand : sustain'd, plant : paint(Hughes), *hath : faith, man : train(Fenton), began : main(2t), began : plain, began : swain, fan : plain(Diaper), man : restrain (Tickell), land : complain'd, land : remain'd, man : maintain, nan : plain, man : vain(Pope), cant : saint, *hath : faith(3t)(Byrome), land : stain'd, man : plain, man : stain, ran : vein(Pitt), hat : straight, man : brain, man : pain(3t), man : plain, man : vain, plant : pain(Dodsley), can : disdain'd, land : detain'd(Lyttleton), land : stain'd, Land : strain'd, man : vain(Johnson), *sate : wait (Thompson), hand : sustain'd, man : chain, man : disdain, man : plain(Whitehead), *mad : paid (Cambridge), *sate : wait(J. W. Cooper), flatter : traitor(Wilkie), clad : plaid(Churchill), man : plain(Cowper), man : contain, man : pain(Lloyd), *sate : weight(Byron), fans : pains, that : plait(Keats),

ME/a/ : ME/ai/(>[ɛ])

hath : saith(Herrick), add : said, hast : say'st(Buttler), man : agen(Lovelace), *mad : said(Cowley), man : again(Brome), ran : again(Dryden3), *hath : saith(Carey), can : again, man : again(King), man : again(3t)(Prior), man : again(Pitt), *had-it : said-it(Moore), *had : said, man : again(Cowper), ME/a/(__ [nd], [nt]) : ME/ai/

granted : painted(Herrick), advanc'd : against, enchanted : acquainted, grand : gain'd, grant : restraint, grant : saint, supplant : saint(Butler), grant : saint(Cleveland), grant : complaint, grant : teint(Dryden2), grant : paint(Halifax), command : gain'd(Duke), grant : paint, grant : saint(Prior), command : ordain'd(Watts), grant : saint(Broome), chant : saint(Byrom), demand : attain'd (Savage), grant : faint(Hamilton), enchants : paints(Moore),

ME/a/ : ME/ai/ は PE では [æ] : [ei] の不完全韻であるが、我々が当初想定していた以上に、主として南・南西・北部出身の詩人に見出されている。Kökeritz は ME/a/ : ME/ai/ を挙げていない。この種の脚韻は EModE 期の初期には少なく、1600~1650年頃から徐々に増え始め、1700年以降再び少なくなっている。これは StE で1650年頃に ME/a/ = [æ], 1700年頃に ME/ai/ = [e:] が確立するにつけ、北部の人は別にして詩人は ME/a/ と ME/ai/ を押韻させるのに躊躇したからであろう。北部方言では ME/ai/ の i は前の母音が長母音であることを示す記号であったため、ME/ai/ = ME/a/ > ME/a/ となり、ME/a/ と ME/ai/ は [e] で押韻可能となった。1700年以前の詩人で ME/a/ と ME/ai/ の脚韻が Donne, Benlowes, Buter, Hannay, Dryden, Sprat, Prior, Granville, Addison, Diaper, Pope, Byrome, Pitt で数例見出されており、1700年以降の詩人ではそれ以前より少なく Dodsley Johnson, Whitehead (London), Cowper に数例見出されているに過ぎない。

I] Kökeritz (1953, pp. 164-5), Dobson (1968², § 6) によれば am, glad, had, hath, mad, sat には ME/a/ 異形が並存していた。Dobson (1968², § 104 Note2) によれば chant, grant, plant に ME/au/ > LME/a/ 異形が並存していた。従って、これらを含む語との脚韻は実際には ME/a/ : ME/ai/ であるかも知れない (*印を付す)。

II] Dobson (1968², § 63) によると、ash, branch, watch には西・北部方言で ME/ai/ 異形が並存していた。この異形は [ʃ, tʃ, ntʃ] の前で [i] が挿入されたものであり、特に13世紀西部方言で見られるが、14-5世紀には衰退したものである。Cercignani (1981, p.102) によると、master, plaster にも、ME /ai/ 異形が並存していた。従って、これらを含む脚韻は ME/ai/ 同士の脚韻であるかも知れない。waist は元来 ME waste で ME/a/ を持っていた語(+印を付す)であり、18世紀まで waste が普通であったが、Johnson の辞典(1755)によって現行の waist が一般化したものである。fast : waste は fast : ME/ai/ = ME/a/ > ME/a/ に依存するものである。ME/a/ : ME/ai/ が見出されている詩人では、同時に ME/a/ : ME/ɛ/, ME/a/ : ME/ɛ:/, ME/ai/ : ME/ɛ/ が見出されており、これらの方言では ME/a/, ME/ai/ は [e] と発音されていることを考慮すれば、ME/a/ : ME/ai/ は方言形・異形の [e] に依存する完全韻である蓋然性が大である。

2. 3. 8. ME/a/ : ME/au/ 用例多数にて Shakespeare 以降のものは省略する。

shall : all, shall : all(9t), shall : befall, shall : call(3t), shall : fall(3t), shall : thrall(Wyatt), shall : all, shall : fall(Howard), shall : all, shall : call, shall : fall, shall : thrall(Gascoigne), shall : appall, shall : ball(Turverville), scalpe : chalke(Spenser-Sc), shall : all, shall : gall, shall : thrall(Spenser Minor), shall : all, shall : call, shall : fall(2t)(Spenser3), shall : all, shall : hall, shall : withal(Spenser6), shall : fall, shall : thrall, shall : all(5t), shall : appall(2t), shall : ball, shall : befall, shall : call, shall : fall(4t), shall : hall(Sidney), shall : all(3t), shall : call, shall : fall(2t), shall : recall(2t)(Warner), shall : all (9t), shall : call, shall : fall(10t), shall : snall, shall : wherewithal, shall : withal(Daniel), shall : all(2t), shall : call, shall : fall(4t)(Drayton), shall : gall, shall : withal (Shakespeare),

ME/a/(__[nd], [nt]) : ME/au/

enchaut : daunt, enchaut : haunt, enchaut : vaunt, graunt : haunt, graunt : vaunt(Spenser1), graunt : haunt, graunt : taunt(Spenser6), graunt : daunt(Spenser-Minor), plant : haunt (Sidney), grant : vaunt(Southwell), chaunt : haunt, chaunt : haunt, enchanted : danted, supplant : vaunt(Drayton), enchanted : haunted(Marlowe), enchanted : haunted, granted : haunted(2t), planted : haunted(Shakespeare),

ME/a/ : ME/au/ は PE では [æ] : [ɔ:] となり、完全韻ではない。この種の脚韻は1650年以前の殆どの詩人に見出されているが、1650年以降の詩人では散見される程度である。これは1650年以降、ME/a/= [æ] , 1600年以降 ME/au/= [ɔ:] が確立されたからである。

I] Dobson (1968², § 4, § 60) によると, shall, scalpe は ME/au/ 異形が並存していたので, これらを含む脚韻は実際には ME/au/ 同士の脚韻であるかも知れない。母音間の l を除く dark l の前では, ME/a/ は LME に ME/au/ に発達した。scalp はどういう訳か知らないが, この発達を免れて, 今日 [æ] を持っているが, EModE 期には ME/au/ 異形が並存していた。

II] chalk, malt, salt, talk, walk には本来の ME/a/ が異形として並存していた。又, ME のフランス語借用語では, 鼻音の前の ME/a/ には ME/au/ 異形が並存しており, StE ではこの異形の方が定着したものである。しかし, Dobson (1968², § 62) によると, haunch, launch, paunch, staunch etc. には EMod E 期には ME/a/ も異形として並存していた。OED によると, 次のフランス語借用語 bauble(6 bable), daughter(6 dahtorr), daunt(4-7 dant), daughter(6 dahtor), haunt(4-7 hant), jaundice(5-7 iandis), laurel(5 larel), lawn(6lane), sauce(5-6 Sc. sals), sausage(7 salsage), vaunt(5-7 vant) には ME/a/ 異形が並存していた証拠がある。従って, これらを含む脚韻は実際には ME/a/ 同士の脚韻であるかも知れない。ME/a/ : ME/au/, ME/a/(__[nd], [nt]) は ME/a/, ME/a/(__[nd], [nt]) を持つ語の ME/au/ 異形か, ME/au/ を持つ語の ME/a/ 異形に依存するかのどちらかであり, 何れにしても完全韻である。

2. 4. ME/a/r

ME/a/r は EModE 期に [a:] に長母音化されていたかは英語音韻史の難問の一つになっている。Kökeritz (1953, p. 170) は [r] の前の ME/a/ は, [f, s, θ] の前の ME/a/ と同様に, Shakespeare の頃には [æ:] に長母音化していたと想定している (しかし, 今日の [ɑ:] は ME/a/ が [a] のまま残った方言音 (Oxford, Bedford) が標準音に取って代わったものとしている)。Dobson (1968², § 43) は Bullokar (Sussex 出身) は ME/a/r と ME/a:/r を同一視しているが, Danies (1640) も両者を同一視している点に着目して, ME/a/r の長母音化は南部方言, 卑俗なロンドン英語では既に ME/a:/ の高母音化の前, 即ち16世紀末までに (heard : compared (Heywood (1534), heard : prepared (Marlowe)), 完了していたので両者は融合していたが, StE では ME/a/r の長母音化はずっと遅く, 17世紀半ば (Daines (1640), Coles (1675), Poles (1675), Cooper (1685)) に見出されており, EModE 期では ME/a/r と ME/a:/r は区別されていたと想定している。[r]の前で, ME/a/ が長母音化したことを示す ME/a/r : ME/e:/r (star : appear), ME/a/r : ME/a:/r (star : care), ME/a/r : ME/ε:/r (star : there), ME/a/r : ME/ai/r (star : air) が16-17世紀の詩人に豊富に見出されている。

2. 4. 1. ME/a/r : ME/e:/r

are : sphere (Daniel), are : eare (Habington), hard : afear'd (Bosworth), starfall : fearful (Butler), are : appear (Denham), star : appear, star : tear (Lovelace), are : appear, are : hear (Cowley), are : ear, are : fear (2t), are : hear (Brome), are : fear (2t) (Hannay), are : hear, afar : near (Hall), bar : spear, star : appear (Dryden³), bard : appear'd (Dryden⁴), star : appear, star : sphere (Sprat), star : appear, star : sphere (Halifax), are : appear, are : disappear (Flatman), arse : fierce, mar : year (Shadwell), mar : appear (Wilmot), are : appear, are : fear, are : sphere, star : sphere (Hammond), are : appear (2t), are : here, regard : rear'd, star : sphere (2t) (Blackmore), are : appear (Garth), star : ear, star : sphere (King), star : appear, far : here, star : sphere, star : tear (2t) (Granville), star : clear (Rowe), are : here, star : fear, star : sphere (2t), star : tear (Watts), star : dear (Somerville), pard : beard (Young), star : rear (Broome), bar : appear, star : appear (Pitt), far : ear (West), star : appear (Boyse), star : ear (P. Whitehead),

2. 4. 2. ME/a/r : ME/a:/r…用例多数にて Herrick 以降のものは省略する。

are : care, are : rare, harde : scarde, are : snare (Turberville), regard : spard (Spenser-SC), are : care, are : fare (Raleigh), are : care (6t), are : dare, are : rare (2t), are : spare (2t), are : sware, are : ware (3t) (Sidney), are : care, are : snare (Lyly), are : care (4t), are : rare, are : spare, are : square (Warner), are : compare, are : fare (Southwell), are : bare (2t), are : care (7t), far : care (2t), regard : dar'd, are : dare, are : declare, hard : far'd, are : share, are : square (Daniel), are : care (5t), regard : compar'd, are : dare, farre : declare, are : fare, are : rare (2t), are : share (3t), are : snare, are : spare, skarr : unawar, are : ware (Drayton), are : care (2t), are : dare, are : share (Campion), are : care, are : compare, are : share,

are : ware(2t)(Corbet), are : care(3t), marring : caring, marr'd : compar'd, are : compare, marr'd : dar'd, pard : far'd, are : rare, pard : shar'd(P.Fletcher), are : care(5t), are : compare, are : declare(4t), parts : declare(J. Beaumont), are : care, are : cobare, are : care, regard : compar'd, are : compare(2t)(G. Fletcher), are : declare, marr'd : far'd(Kynaston), are-not : care-not, are-not : declare-not(Ford), are : care(2t), mar : care(2t), are : declare(3t), are : share, are : spare(Drummond), are : care(2t), are : compare, are : ware(Browne), are : beware, are : care(2t), farr : care, are : compare(2t), are : fare, barre : scare, are : share(3t), are : ware(Herrick),

2. 4. 3. ME/a/r : ME/ε/r

farr : forbear(Raleigh), are : forbear(F. Beaumont), are : where(Drummond), are : where(Habington), are : bear(Sherburne), scar : bear(Shadwell), are : bear(Daniel), star : wear(Butler), are : there, are : weare(Crashaw), are : bear(Denham), are : bear(2t), are : forbear, are : there(5t), are : wear(2t), are : where(Cowley), are : bear(Sherburne), are : bear, are : forswear(Wilmot), are : there (2t), are : there(Hammond), are : there(Cotton), star : bear(Dryden4), are : there(2t)(sprat), far : bear(Halifax), are : swear, far : there(Flatman), scar : bear(Shadwell), are : there(2t), are : wear(Hammond), are : forswear(Duke), are : there, star : wear(Garth), are : bear(2t), are : there(Pomfret), star : there(Prior), star : wear(Granville), are : wear(Swift), are : bear, far : there(Yalden), are : there(Rowe), car : bear(2t)(Hughes), are : there(Diaper), star : bear, star : wear(Pope), are : swear(Dodsley), car : wear(Jenyns), are : swear(Shenston), car : bear, are : beare, are : tear(Cambridge), are : wear(Churchill), far : there(Cowper), are : whate're(Byron), are : swear(Dodsley), car : wear(Jenyns), are : forswear(Shenston), car : bear(Gray), star : bear(Cawthorn), are : wear(Churchill), far : there(Cowper), are : where(Keats),

2. 4. 4. ME/a/r : ME/ai/r…用例多数にて Dryden 以降のものは省略する。

are : empare(Spenser1), are : faire, are : haire(Spenser4), are : faire(Spenser-Minor), are : dispaire(Lyly), are : ayre, are : despaire, are : faire(3t), are : repaire(Warner), are : despayre, are : repayre, are : stayre(Drayton), are : aire(2t), are : faire(2t), are : repaire(Donne), are : aire(2t), are : faire, are : repaire(Stirling), are : faire, are : repaire(Corbet), are : fair(G. Fletcher), are : faire(Browne), are : ayre, are : despaire, are : faire(3t), are : haire(Herrick), are : fair, are : hair, are : repair(King), are : faire, are : fayre, are : paire(Carew), are : air(6t), are : despair, are : fair (4t), are : impair, are : pray'r(3t), are : prayer, star : air(2t)(Benlowes), are : faire(5t), are : prayer(Habington), are : faire(2t), are : faire(2t)(Davenant), are : fair(2t)(Waller), are : fair, are : pair, are : prayer(Milton), are : air(Suckling), are : despaire, are : fair(4t), are : faire(Whiting), are : fair(2t)(Cartwright), are : repair(Butler), are : chair, are : fair(Cleveland), are : despaire, are : fair(2t)(Denham), are : fair, are : faire(Crashaw), are : air, are : Payre(Lovelace), are : despair, are : fair

(9t), are : pair, are : prayer(Cowley), are : fair(6t), are : hair, are : prayer(Sherburne), are : fair(2t) (Brome), are : fair(2t), are : Hair(2t), are : pray'r(Marvell), are : despair(Stanley), are : fair (Hannay), are : air(Hall), are : air, are : fair(4t), star : air, star : fair, star : fair(2t)(Cotton), are : air, are : despair, are : repair(Phillips),

[r]の前で, ME/a/ が長音化したことを示す ME/a:r : ME/e:r(are : ear), ME/a:r : ME/a:r(star : care), ME/a:r : ME/ε:r(star : there), ME/a:r : ME/ai:r (star : air) は, 16世紀半ばから散見し, 17世紀半ば以降豊富に見出されている。ME/a:r : ME/e:r は ME/a/r を持つ語 (are, bar, far, hard, star, war) の ME/a:r 異形 (Dobson, 1968², § 4, § 43, Note 2) と ME/e:r を持つ語の ME/ε:r 異形 (Dobson, 1968², § § 118-126) に依存するものである。ME/a:r : ME/a:r, ME/ε:r, ME/ai:r は ME/a/r を持つ語の ME/a:r 異形に依存する脚韻である。異形の存在は異形に依存するかもしれないという可能性を残すだけで, 異形に依存する脚韻であることの証明にはならない。多くの詩人に見出されるかなりの脚韻を異形に依存するものとして退けるのは決して自然ではない。脚韻上の証拠から, 音韻 A と音韻 B が融合の初期段階には, 融合率は極めて低く, しかも押韻語には相手方の音韻を持つ異形が併存していた。融合が進むにつれ, 押韻率が高くなり, 異形に依存しない脚韻が多くなるのが一般的であった。ME/a/ (__[r]) の長音化の証拠は17世紀半ばから出現するという正音学者からの証拠と [r] の前で, ME/a/ が長音化したことを示す ME/a:r : ME/e:r, ME/a:r : ME/a:r, ME/a:r : ME/ε:r, ME/a:r : ME/ai:r は, 16世紀半ばから散見し, 17世紀半ば以降豊富に見出されているという脚韻からの証拠はほぼ同じものを指し示しており, ME/a/ (__[r]) の長母音化は17世紀半ばに生じたと想定してよい。

2. 4. 5. ME/a:r : ME/ε:r

art : *desart, deper : *convert, deper : *desert, deper : *desert, harme : discerne, hart : *desert, hert : *conuert, hert : *convert(2t), hert : *desert(4t), hert : pervert, hert : revert(2t), herte : *deserte(2t), hertes : *convertes, hertes : *desertes, part : *desart(2t), part : *desert(2t), parte : *deserte, partes : *desertes, smart : *conuert, smart : *desart, smartes : *desertes, smert : *desert, starve : deserve, starve : *serue, stertes : *convertes, sterue : *serue(2t), sterue : *swarue, sterve : reserve(Wyatt), art : *conuart, art : *conuert, art : subvart, depart : *conuart, depart : subvart, hart : *conuert, hart : *desart, hart : reuart, part : *desart(2t), smart : *conuart, sterue : *serue, sterues : *serues(Turverville), regard : *heard(Spenser1), art : *desart(2t), harts : *desarts, part : *desart, parts : *desarts, smart : *desarts, sterue : *serue(Spenser2), apart : *conuert, bard : transfard, dart : *desart, dart : peruart, depart : *conuart, gard : *hard, hard : prefard, hart : peruart, part : *conuart, regard : *prefard, smart : *desart, smart : peruart(Spenser3), art : reuert, depart : reuert, hard : *heard, hart : *desart, hart : reuert, kerue : deserue, kerue : *serue, part : *desart, regard : *hard, sterue : *deserue, sterue : *serue(2t)(Spenser4), dart : *conuert, hart : *conuert, smart :

*conuert(Spenser5), art : *desart, hart : *desart, mard : *prefard, parts : *desarts, regard : *prefard, smart : *desart, smart : *desarts(Spenser6), darling : pearling, farre : *preferre, hard : *heard, hart : peruart, heart : *conuert, parson : sermon, regard : *heard, smart : peruart, start : peruert, steruing : deseruing(Spenser-Minor), †farre : were, sterued : preserued, sterued : *serued(Raleigh), barr'd : *heard, carve : *serve, carve : *swerve, †far : her, harming : *learning, harte : *desarte, heart : *desart, part : *desart, starve : *serve, starve : *swerve, sterve : *serve, sterved : preserved, sterved : *served(Sidney), heart : *desert (Lyly), caru'd : *saru'd, depart : *desart, hart : *conuert, heart : *conuert, mart : *conuert, part : *conuert, starue : *desarue(Warner), art : *convert, art : *desert(2t), art : pervert, arts : *deserts, debarr'd : *heard, hard : *heard, heart : *convert(2t), heart : *desert, heart : divert, hearts : *converts, hearts : *deserts(6t), part : *desert(2t), part : pervert, parts : *converts, parts : *deserts(8t)(Daniel), bard : *heard, carv'd : preserv'd, carv'd : reserv'd, carv'd : *serv'd, depart : *desert, hart : *convart, hart : *convert, heart : *desert(4t), heart : subvert, hearts : *deserts, marrer : were, part : *desert, parts : *deserts, regard : *heard, skard : *heard, starve : deserve, starve : *serve(2t), starved : observed, sterved : *served(Drayton), carving : preserving, scard-me : *heard-me(Marlowe), art : *convert(2t), departest : *convertest, heart : *convert, part : *desert, parts : *deserts, regard : *heard(Shakespeare),

ME/a/r : ME/ε/r は PE では [a:] : [ə:] の不完全韻であるが、EModE 期以降、豊富に見出されている。-er- という結合は ME で -ar- となったが、15世紀以前には余り多くはなかった。15世紀以降 -ar- という綴字が次第に増え、多くの語の発音と綴字は -ar- で固定化されるに至った。一方、clerk, Derby, Berkely では綴字は -ar- に変わらず、-er- のままであったが、発音は [a:] のまま残ったものである。Dobson (1968², § 64, § 65, Note4) によると、[r] の前の ME/ε/ は北方方言では14世紀初頭に、南部方言では14世紀の終わりまでに ME/a/ に変化し始めたが、15世紀まで一般的にならなかった。少なくとも EModE 期には、次の語には低母音化による ME/a/ 異形が並存していた。certain, conserve, convert, defer, desert, earl, earn, err, fervent, heard, her, herd, infer, jerk, kernel, learn, merchant, mercy, perfect, pert, person, prefer, serge, servant, serve, service, swerve, yerck, yearn (ME/ε/ の ME/a/ 異形に依存するものには * 印を付す)。heard に hard という発音が存在していたことは綴字、文法学者の所説によって明らかである。heard の ME の形は herde で、hard, harde という綴字は15~18世紀にかけ、個人的な記録はもとより、刊行されている作品においても、極めてありふれたものであり、Margaret Paston, Cely 家の人々、Lord Berners, Sir Thomas Elyot, Cranmer, Machyn, Latimer, Gabriel Harvey, Lord Burghley, Verney 家の人々及び Lady Wentworth 等に見出され、当時、上流階級の教養ある人々の口語的発音であったことは殆ど疑いの余地はない。この発音は Scotland の教養ある人々の間では現在でも見られる。従って、ME/a/r : ME/ε/r は ME/ε/r の ME/ar/ 異形に依存する完全韻である。EModE 期には ME/ε/r には14世紀以降、

低母音化を受けた [a:] r と17世紀初めに中舌化された [ə:] r の二つの発音が並存していたことになる。

2. 4. 6. ME/a/r : ME/i/r

hert : shert, smert : shert(Wyatt), farth : birth(Browne), hearth : mirth(6t), hearth-here : mirth-here(Herrick), start : dirt(Herbert), hearth : birth, hearth : mirth(Milton), farth : birth (Cartwright), far : sir(Lovelace), far : stir, far : stirre(Vaughan), hearth : mirth(Cotton), hearth : mirth(Dryden1), hearth : birth(Dryden4), hearth : birth(Sprat), unarm'd : confirm'd(Jenyns), hearth : mirth(Lyttleton), farth : birth(Smart), hearth : mirth(Beattie), hearth : birth (Byron).

ME/a/r : ME/i/r は PE では [a:] : [ə:] の不完全韻であるが⁸, EModE 期以降 Wyatt, Browne, Herrick, Herbert, Cartwright, Lovelace, Vaughan, Cotton, Dryden, Sprat, Lyttleton, Smart, Beattie に見出されている。Dobson (1968², § 75) によると, birth, mirth, shirt, sir に ME/ɛ/ 異形が⁸, OED は confirm, dirt, stir に ME/ɛ/ 異形 (3-6 conferme, 6-7 berth, 4-6 ster) が並存していたことを示している。従って, ME/a/r : ME/i/r は東・西部・Scotland 方言での ME/i/ の ME/ɛ/ 異形 > 低母音化 > ME/a/ 異形に依存する完全韻となる。

2. 4. 7. ME/a/r : ME/u/r

darke : warke(Howard), carke : warke, darke : warke, dirke : mirke, larke : warke(Spenser-Sc), barke : warke, marke : warke(Spenser2), arke : warke, armes : wormes, clerkes : werks (Spenser-minor), marke : warke(Browne), regard : word(Marmion), harn : urn(Suckling), dark : work(Butler), charms : worms(2t)(Watts), harm : worm(Keats).

ME/a/r : ME/u/r は PE では [a:] : [ə:] の不完全韻であり, EModE 期から見出されているものの, ME/a/ : ME/u/ 同様, 北・南・南西部方言で散見される現象に過ぎない。Spenser の work の wark という臨時綴字からわかるように, OED は work に ME/a/ 異形が並存していたことを示している。work を含む脚韻はスコットランド, 北部方言異形 ME/a/ (4- wark) に依存する視脚韻である。Dobson (1968², § 90 Note2) によると, この ME/a/ 異形は work の ME/ɔ/ 異形が平唇化したものである。dirke : mirke は dark, murk の ME/i/r 異形 (4-6 dirk, 3-7 mirke) に依存する eye-rhyme である。murk は Scotland 方言では mirk が好まれている。OED にも urn, word, worm に ME/a/ 異形が存在していた証拠はないが, これらを含むものも, worse, work に倣った方言的異形 ME/u/ > [ɔ] > [a] に依存するものであろう。事実, Bullokar には ME/u/ の ME/a/ 異形に依存する last : must, smart : hurt が見出されている (Dobson, 1968², Vol.1, p.109)。worm (<OE wurm) は11世紀頃, [w] の円唇化によって, wurm となり, やがて Kent 方言を除く他の地域に広まった。ModE 期の worm はこの wurm の書記上の変形である。今までの検討の結果, EModE 期以降, ME/a/r は ME/a/r だけでなく, ME/e:/r, ME/a:/r, ME/ɛ:/r, ME/i/r, ME/u/r, ME/ai/r と押韻しているが, それらは融合を示すものではなく, 押韻語の一方に相手方の音韻を持つ異形が並存しており, 何れにせよ完全

韻であることが明らかとなった。

2. 5. ME/a/ (__ [f,s,θ])

[f, s, θ] の前の ME/a/ が何時 [æ:] になったかは未だに開かれた問題である。Wyld (1936³, p. 204) は Cely Papers に marster (masters), farther (father) という臨時綴字が見出されることから、この環境の ME/a/ は以下の発達過程を経たものと想定している。

[æ] (15世紀末) > [æ:] (16世紀末) > [a:] (17世紀) > [ɑ:]

Kökeritz (1953, pp.167-8) は [f, s, θ] の前の ME/a/ に長母音化が生じたのは ME/a/ が [æ] に変化した1650年以降であるとしている。しかし、彼は Wyld 説の [æ] > [æ:] > [a:] は「余りにも短期間に余りにも多すぎる変化である」と言う理由で反対し、今日の [ɑ:] は ME/a/ が前母音化しなかった方言 (Bed-ford, Oxford) が StE に取って代ったものとしている。

Dobson (1968², § 50) は自由位置の ME/a/ が前母音化したとき、[f, s, θ] の前の ME/a/ は ME の音価のまま残り、この [a] が17世紀後半に [a:] を経て、更に [ɑ:] に後退したものとしている。Cooper が初めて長母音の証拠を提示している。16世紀後半に [f, s, θ] の前の ME/a/ にその音価を問わず長音形が存在していたことに関しては ME/a/ (__ [s]) : ME/a/ (fast : waiste), ME/a/ (__ [s]) : ME/ε/ (fast : feast), ME/a/ (__ [s]) : ME/ai/ (path : faith) により証明される。これらは当時 [f, s, θ] の前の ME/a/ に長音 ([æ] ないし [æ:]) が存在していた決定的証拠のように見える。しかし、ME/a:/, ME/ε:/, ME/ai/ を持つ語は16-17世紀には短音が存在していた証拠があるので、これらの脚韻も [æ:] の確証にはならない。ME/a/ (__ [r]) の脚韻の処理のところで展開した同じ理由によって、脚韻の証拠は無視できない。ME/a/ (__ [f,s,θ]) の長音化の脚韻上の証拠は16世紀半ばに散見され、17世紀半ばにはどの詩人にも一様に見出されるようになる。正音学者と脚韻の証拠はほぼ同じものを指しており、ME (__ [f, s, θ]) の長母音化は17世紀半ばに生じたものと想定してよい。

2. 5. 1. ME/a/ (__ [f, s, θ]) : ME/a:/ (ME/a:/ : ME/a/ (__ [f, s, θ]) で入力) 用例多数にて Dryden

以下のものは省略する。

apase : pas, case : alas, case : pas, chace : passe(2t), escaped : passed, face : alas, face : passe(2t), fase : passe, grace : passe, hast : fast, hast : forecast, hast : last, hast : past, haste : paste, nature : master, space : passe(2t), tast : fast(4t), tast : last(3t), tast : past, taste : paste, taste : repast, trace : passe, wast : blaste, wast : fast(3t), wast : last(4t), wast : past(3t), waste : a-gaste, waste : past, waste : paste, waste : repast(Wyatt), chast : aghast, chast : cast, chast : ouercast, chast : repast, hast : fast, hast : forecast, hast : last, hast : ouercast, hast : ouerpast, haste : past, hast : repast, hast : vast, haste : fast, haste : past, place : pace, plaste : repast, taste : repast, waste : faste(2t)(Spenser-1), chas'd : cast, chaste : faste, defaste : past, embrac't : cast, graste : caste, hast : last(2t), haste : cast, plac't : cast(2t), plac't : fast, place : grasse, rast : fast, tast : cast, tast : last, taste : cast(2t), taste :

cast(2t), taste : overpaste, wast : blast, wast : cast, wast : last, waste : blast, waste : last, waste : past, wasteth : lasteth(Sidney), past : exhaust(Daniel), grac'd : cast, grac'd : past, hast : cast(2t), haste : cast(3t), haste : fast(3t), haste : forecast, haste : past(2t), hasts : casts(2t), hasts-them : casts-them, tast : cast, taste : last, taste : past, wast : cast(2t), wast : past, waste : cast(3t), waste : last, waste : past(2t), wastes : blasts, wasts : casts(Drayton), haste : blast, haste : fast(7t), haste : last, haste : past(2t), taste : fast(2t), taste : last(3t), waste : past(Shakespeare), chast : last, hast : last, haste : cast, haste : fast, plac'd : cast, plac'd : o'rpast, tast : last, tast : past, taste : cast, taste : last, wast : fast(2t), wast : last(3t), wast : mast, wast : o'past, waste : cast, waste : fast, waste : last(Donne), hast : last, haste : fast, haste : past, plac'd : last, tast : cast, wast : last, waste : fast(Herrick), grace : glasse, place : glasse, taste : fast, taste : last(2t), taste : repast, taster : †master(2t), wasted : blasted(Herbert), face : glasse(3t), hast : blast, hast : past, tast : fast(4t), wast : blast(Crashaw), face : glasse(3t), face : pase, hast : blast, hast : cast, hast : fast, haste : cast, haste : fast, taste : master, waste : blast(Lovelace), grace : was, place : was(Brome), haste : cast, haste : past(2t), plac'd : last, space : pass, tast : blast, tast : last, bwasts : blasts (Vaughan), chaste : last, defac't : last, embrac't : laste, embrac't : last, face : glass, face : glasse(2t), grace : glass, hast : fast, haste : fast(2t), haste : past, pace : glass, plac't : fast, rac't : last, space : glass, taste : laste, waster : faster, wasters : maisters(Cotton), chast : past, chaste : fast, chast : last, embac'd : cast, face : glass, face : grass, gaze : pass, grac't : last, grace : pass, hast : cast(2t), hast : fast, hast : last(3t), hast : past(3t), hasther : faster, haste : cast, haste : fast(2t), haste : last(2t), haste : past(6t), hasts : masts, imbrac'd : last, imbrac'd : past, pace : grass, place : pass, taste : last, taste : past, tasted : lasted, waste : fast(3t) (Dryden-1),

この種の脚韻は PE では ME/a/ = [æ] : ME/a:/ = [ei] となり不完全韻であるが、EModE 期以降、詩人は ME/a/([f,s,θ]) を持つ語と ME/a:/ を持つ語をしばしば押韻させている。Dobson (1968², §6) によると、ME/a/ は開音節では長母音化して ME/a:/ となったが、EModE 期にはこの長母音化を免れた ME/a/ 異形が並存していた。ME/a/([f,s,θ]) : ME/a:/ は, chaste, haste, taste, waste 等の ME/a/ 異形に完全韻である。

2. 5. 2. ME/a/([s]) : ME/ε:/

fashion : reason, passion : season(Wyatt), pass'd : east, last : feast(Sprat), pass : ease(King), last : beast, mass : increase(Addison), brass : seas(Watts), cast : east, pass'd : east(Keats),

ME/a/([s]) : ME/ε:/ (fast : feast) = [æ:] : [ε:] は一見したところ、[f, s, θ] の前で ME/a/ > [æ:] に変化したことの証拠のように思われる。しかし、Dobson (1968², §8) によると、east, feast, reaon, season には ME/ε/ 異形が並存していた証拠があるので、ME/a/ とこれらの語との脚韻は ME/a/ : ME/ε/ であるかも知れない。これらの脚韻が見出されるのは北部・Scotland・Kent 出身者

であること、及びこれらの方言では ME/a:/, ME/ɛ:/ は短母音化されていることを考慮すれば、ME/a/ : ME/ɛ/ は [æ:] : [ɛ:] 又は [e:] の類韻でなくではなく、ME/a/ の方言音・異形 [ɛ] 又は [e] に依存する完全韻である確率が高くなる。

2. 5. 3. ME/a/ ([s] : ME/ai/)

fasts : wasts(Spenser-Sc), ouercast : wast, vast : wast(Spenser1), fast : wast(Spenser2), cast : wast(Spenser5), fast : waist(Shakespeare), cast : waist, fast : waist(Davies), path : faith(Donne), path : faith(Drummond), path : faith(Carew), cast : waist, last : waist(Whiting), lath : faith(Butler), can't : saint(Brome), bath : faith(Dryden1), cast : waist, fast : waist(Dryden4), pass : days(2t)(King), brass : praise, past : waist(Prior), fast : waist(Granville), glass : rays, past : waist(Yalden), brass : raise(Addison), path : faith(Fenton), path : faith(Broome), path : faith(2t)(By-rom), path : faith(3t)(Dodsley), cast : waist(Jenyntse),

ME/a/ : ME/ai/ は PE では [æ] : [ei] の不完全韻であるが⁸、主として南・南西・北部出身の詩人に見出されている。Kökeritz は ME/a/ : ME/ai/ を挙げていないが⁹、

I] Dobson (1968², §6, §50) によれば cast, last, lath, path 等には ME/a:/ 異形が並存していたので、これらを含むものは ME/a:/ : ME/ai/ となる。

II] waist は元来 ME waste で ME/a:/ を持っていた語であり、18世紀まで waste が普通であったが、Johnson の辞典 (1755) によって現行の waist が一般化したものである。fast : wasit は fast の ME/a:/ : waist の ME/a:/ となり、いずれにしても完全韻となる。

2. 5. 4. ME/a/ ([s, f]) : ME/au/

lawghter : besoght-her, lawghter : doghter(Wyatt), past : exhaust(Daniel), laught : caught(Warner), laughter : wrought-her(Drayton), after : daughter, shaft : draught(Jonson), laughter : daughter(Drummond), after : daughter(Marmion), laugh'd : draught(Whiting), laughter : daughter(Suckling), laughter : slaughter(Vaughan), laughter : daughter(4t), laughter : slaughter(Whiting), after : slaughter(Butler), laught : Draught(Dryden3), after : slaughter(2t)(Hamilton), pass : jaws(Lovelace), after : daughter, hereafter : slaughter(Brome), after : daughter(Hannay), laughter : slaughter(Vaughan), hereafter : slaughter(Carey), laugh'd : draught(Smart), laugh'd : draught(Cowper), hereafter : daughter(King), pass : cause(Byron), after : slaughter(2t)(Hamilton), pass : cause(Byron), shafts : draughts(2t)(Keats).

ME/a/ ([f]) : ME/au/ ([l]f)

after : halter(Shakespeare), laugh : half, staff : half(Butler), laugh : calf (King), laugh : behalf, laugh : calf(Green), laugh : behalf, laugh : calf (Green), laugh : half(Moore), laugh : calf(Prior), laugh : calf(2t), laugh : half(Swift), laugh : half (Moor), laugh : behalf(W. Whitehead), laugh : half, laugh : half(3t), staff : half(2t)(Churchill), laugh : half(Lloyd), laugh : calf, laughof-them : half-of-

them(Byron), chaff : half, laugh : half(Keats),

ME/a/(__[f]) : ME/au/ は PE では [a:] : [ɔ:] の不完全韻であるが, EModE 期以降, 散見されている。

Dobson (1968², § 62) によると, ME/au/ を持つ語には ME/a/ 異形が並存していた。従って, ME/a/ (__ [f]) : ME/au/ は ME/au/ を持つ語の ME/a/ 異形に依存するものである。OED は caught, saught, slaughter に ME/a/ 異形 (5 caght, 4-5 saght, 4-5 slaghter) が並存していたことを示しているが, cause, exhaust, jaw に ME/a/ 異形が並存していた証拠を挙げていない。しかし, past : exhaust etc. も, ME/au/ > ME/a/ > ME/a/ になった方言では方言音 ME/a/ に依存する完全韻となる。ME/au/ は, [x] > [f] の後, 15-16世紀に [a] に短母音化され, 17世紀に無声摩擦音の前で長母音化され, EModE 期には [a], [a:] が並存した。daughter, taught もその後の音変化では PE [a:] となるはずであるが, これは Eastern 方言又は卑俗語の影響で PE [ɔ:] となった。OE dohtor から規則的に発達した形 doughter は16世紀まで用いられ, 現代 Scotland dowchter, 北部方言 dowter に名残を留めているが, 16世紀に現れた南部方言の daughter (OE/ɔ/ > EME/a/ > ModE/au/) に取って代わられた [OED]。calm, half, halve の PE 音 [a:] は ME/a/ > ME/au/ > [ɪ] 削除 > ME/au/ > [a:] を経たものである。

ME/a/(__[l]) は1400年頃, darl "l" (ll 又は l+ 子音) の前で ME/au/ に発達し, 更に ME/au/ > a/ になったものである。half の [a:] の正音学者の証拠は1650年以前には存在せず, Coles (1670) に初めて見出されている (Dobson, 1968², § 238)。

2. 6. ME/a/((c) [w] __)

Dobson (1968², § 194) によると, [w] の ME/a/ に与える円唇化は Robinson (1619) に初めて生じており, Kökeritz (1953, p.171) は, Shakespeare から一例 what : wot を挙げているが, ME/a/ ([w] __) は EModE 期には [ɔ] になっていなかったと想定している。最初, 卑俗・東部方言で始まったものが, 漸次 StE に浸透し, 17世紀半ば頃に確立していく。但し, [g,k,θ] の前では円唇化を免れ [æ] のままである (wag, wax, twang)。

2. 6. 1. ME/a/((c) [w] __) : ME/a/(ME/a/ : ME/a/((c) [w] __) で入力) 用例多数にて Dryden 以降の例は省略する。これらは ME/a/ に依存するものであり, ME/a/([w] __) が [ɔ] になったかに関しては何も示さない。

can : swan, kant : want, las : was, man : wan, pan : swan, rann : wann, skant : want, skant : want, that : what(Wyatt), alas : was, ass : was(2t), man : wan(3t), skant : want(3t(Gascoigne), alas : was, flat : what, has : was(4t), ran : wan(Spenser1), catch : watch, lass : was, match : watch(Sidney), match : watch, scant : want(Shakespeare), alas : was, catch'd : watch'd, dash : wash, mass : was, scant : want, that : what(3t)(Donne), alas : 'twas, alas : was(2t), ant : want, at : what, can : swan, catch-it : watch-it, hand :

wand(2t), has : was, lasse : was(2t), man : swan, stand : wand(2t), that : what(4t)(Herrick), dash : wash, man : wan(2t), scant : want, that : what (Herbert), dash't : wash't(Crashaw), barrells : quarrels, dash'd : wash'd, fan : wan, hand-her : wander(Lovelace), dasht : washt, man : wan, mass : was(Marvell), alas : was, as : was, catch : watch(2t), has : was, hatch : watch(2t), man : wan(2t), thatch : watch(Vaughan), land : wand (Dryden1), ant : want, Hand : wand, land : wand, scant : want, stand : wand, understand : wand (Dryden2), ants : wants, Band : wand, began : swan, hand : wand(3t), man : wan(Dryden3), began : wan, dispatch'd : overwatch'd, hand : wand, man : wan, mass : was(Dryden4),

2. 6. 2. ME/a/((c) [w]__) : ME/a/(__[s]) (ME/a/(__[s]) : ME/a/([w]__) で入力) 用例多数に Donne 以降の例は省略する。これらは ME/a/ に依存するものであり, ME/a/([w]__) が [ɔ] になったかに関しては何も示さない。

pase : was(Wyatt), grasse : was, passe : was(Turberville), brasse : was, glass : was, grasse : was, pass : was, passe : was(16t)(Gascoigne), brasse : was, glasse : was(Spenser-Sc), alas : was, bras : was(3t), glas : was(4t), gras : was (3t), mas : was, pas : was(15t), trespass : was(Spenser1), bras : was(2t), gras : was(2t), has : was, masse : was, pas : was(5t), pass : was(Spenser2), glas : was(3t), gras : was(2t), pas : was(8t), passe : was(Spenser3), bras : was, brasse : was, glasse : was(2t), gras : was, ouerpas : was, pas : was(8t)(Spenser4), pas : was(6t)(Spenser5), bras : was, glas : was, gras : was(2t), ouerpasse : was, pas : was(6t), pass : was, passe : was(6t)(Spenser6), glasse : was, grasse : was(2t), pas : was, passe : was(5t)(Sidney), passe : was(2t)(Lyly), glas : was, was : glass, was : pas (13t), pass : was(3t), passe : was(11t)(Warner), glass : was(Southwell), glass : was, pass : was(14t)(Daniel), claspe : waspe, glasse : was(4t), graspe : waspe, grasse : was, lass : was, pass : was(2t), passe : was(5t)(Drayton), glass : was(2t), grass : was, pass : was(2t)(Shake-speare), glasse : was(3t), pass : was, passe : was(3t)(Marlow), grass : was, pass : was(6t)(Davies), glasse : was(4t), grasse : was(2t), passe : 'twas, passe : was(12t)(Donne),

2. 6. 3. ME/a/((c) [w]__) : ME/a/ (長母音化) (ME/a/ (長音母化) : ME/a/ ([w] __) で入力) 用例多数にて Dryden 以降の例は省略する。

plant : want(Wyatt), plant : want(Gascoigne), answer : wander(Spenser3), granteth : wanteth, graunt : want, plant : want(3t), planteth : wanteth(Sidney), grant : want(Daniel), grant : want, granted : wanted(2t), plant : want, planted : wanted(Drayton), plant : want(Marlow), command : wand, enchanting : wanting(Campion), grant : want(Jonson), enchaunt : want, grant : want, supplant : want(2t)(Stirling), plant : want, plants : wants(Herbert), grant : want(Marmion), want : plant(Davenant), grant : want, plant : want, supplant : want(Bosworth), enchant : want, supplant : want (Butler), grant : want(Cleveland), grant : want(Cleveland), grant : want, plant : want, plants : wants(Denham), plant : want(Lovelace), plants : wants(Chamberlain), command : wand(2t), plant :

want, plants : wants(Marvell), grant : want, granted : wanted(Hannay), plant : want(Vaughan), granted : wanted, plant : want(Cotton), grants : want(2t)(Dryden1),

ME/a/ : ME/a/([w]_) , ME/a/(_[s]) : ME/a/([w]_) , ME/a/(_[nd]) : ME/a/([w]_) は PE では [æ] : [ɔ] の不完全韻であるが, EModE 期以降豊富に見出されている。これらの脚韻は押韻語が同じ母音であることを示すだけで, それ以上のことは示さない。17世紀半ばまでの詩人は明らかに wand : hand, warm : harm 等が日常の発音から押韻しなくなってからも詩的伝統により, 使い続けている。これが所謂伝統的脚韻である。唯忘れてならないことはこれらの脚韻はかつては完全韻であったということである。一方, war : for; sore はそれらが今日と同様当時においても完全韻であっても綴字が違うという理由で避けている。EModE 期に PE の発音からすれば一見不完全韻と思われる wand : hand が多く, 完全韻と思われる war : for が少ないのはこの理由のためである。

2. 6. 4. ME/a/([w]_) : ME/a/

was : case, was : place(Wyatt), was : chase(Gascoigne), was : face(Spenser-Minor), was : case, was : fase, was : grace(Spenser-5), was : case, was : chase, was : place(Spenser-6), was : blaze (Sidney), was : face, was : place(Daniel), was : face, was : grace(Southwell), was : grace, was : race(P. Fletcher), was : place(Drummond), was : case(Kynaston), was : face(Browne), was : grace (Herbert), was : chase, was : face, 'twas : grace, was : place(3t), was : race(Chalkhill), was : face (3t), was : grace, was : space(Benlowes), was : face, was : place(Bosworth), was : grace, what : rate(Suckling), swaddle : cradle(Whiting), was : case, washes : faces, was : place(Butler), was : chase, was : place(2t)(Denham), was : face(Vaughan), what : statye(Hall), was : deface, was : face(2t), what : fate, was : grace, was : place(5t), was : race, what : state(Cotton), was : place (Dryden1), was : face, was : place, swans : planes(Dryden2), swan : crane, was : face, was : place(Dryden3), was : embrace, was : embrace, eas : race(2t), was : space(Dryden4), was : face, was : race(Sprat), was : face, was : place(Flatman), was : face(Ayres), was : embrace(Hammond), was : case, swadle : cradle(Prior), was : face, was : race(Rowe), was : case, was : face(Jenyns), was : face, was : grace(Thompson), was : case(W. Whitehead), was : face, was : race(Cambridge), what : fate(Cooper).

ME/a/([w]_) : ME/a/ は PE では [ɔ] : [ei] の不完全韻であるが, EModE 期以降見出されている。これらは ME/a/ を持つ語の ME/a/ 異形に依存する完全韻であり, [w] が ME/a/ に円唇化の影響を与えたかに関しては何も示さない。

2. 6. 5. ME/a/([w]_) : ME/au/

want : daunt, want : graunt(Daniel), want : dant, want : daunt(3t), want : hant, want : vaunt(3t), wants : haunts(2t)(Stirling), want : daunt(P. Fletcher), want : taunt(Herick), want : vaunt(Ha-

binton), was : cause(11t), was : laws(Davenant), want : haunt(Hannay), was : cause(Dryden4), want : vaunt, was : cause(Blackmore), was : laws(Duke), was : cause(Garth), quarrel : laurel(2t), want : haunt(Prior), wants : taunts(Somerville), was : draws(2t)(Pope), want : haunt(Green), wanted : taunted(Dodsley), was : cause, what : nought(Brooke), wants : vaunts, was : draws, was : jaws (Moore), quarrel : laurel(W. Whitehead), quarrel : laurel(Cowper), quarrel : laurel(Lloyd), wants : haunts(Langhorne), quarrrel : laurel, want : haunt, was : cause(Byron), want : haunt(Keats). ME/a/([w]__): ME/au/ は PE では [ɔ] : [ɔ:] の不完全韻であるが, EModE 期以降, 散見されている。筆者は ME/au/ は15世紀にすでに [ɔu] になっており, 16世紀末には [ɔu] > [ɔ:] に単母音化されていた。しかし, [ɔ:] が一般的になるのは17世紀に入ってからであると想定している。この [ɔ:] は17世紀半ばに ME/ɔ/r (laws : loss) および ME/ɔ/(__[f,s,θ] (lawn : morn) と融合することになる。この脚韻は一見すると, ME/a/([w]__) が [ɔ] になった証拠に見える。Dobson (1968², § 62) によると, フランス語借用語では鼻音の前の ME/a/ には ME/au/ 異形が並存しており, StE ではこの異形が定着した。haunch, launch, etc. の PE [ɔ:] ではこの異形が StE で確立したが, EModE 期には ME/a/ も異形として並存していた。OED は daunt, haunt, laurel, taunt, vaunt には ME/a/ 異形 (4-7dant, 4-7 hant, 5 larel, 6-7 tant, 5-7 vant) が並存したことを示している。更に, 卑語・方言では ME/au/>ME/a:/ になったので, OE 本来語 draw, law にも ME/au/>ME/a:/>ME/a/ 異形が充分考えられる。従って, ME/a/([w]__) : ME/au/ は ME/a/ に依存する完全韻となり, ME/a/([w]__) = [ɔ:] の確証にはならない。

2. 6. 6. ME/a/([w]__) : ME/ɔ/

wallowed : followed(Spenser3), what : plot(Spenser-Minor), what : begot(Southwell), swallow : follow(F. Beaumont), swallow : follow(Herrick), quarrels : mortals(Butler), wallow : follow, want : upon't(Lovelace), what : not(2t)(Brome), swallow : follow(Hannay), wallow : follow(Dryden1), swallow : follow(2t)(Shadwell), what : begot, what : not(2t)(Wilmot), swallow : follow(Carey), what : forgot(Prior), quarel : moral, quarrels : Morals(3t), swallow'd : follow'd, was-it : closet, what : hot, what : plot(Swift), what : not(Congreve), what : got(Somerville), what : not(Pope), swallow : follow(Brooke), swallow : follow(Armstrong), quarel : mortal(Cambridge), was-it : closet(Cowper), what : got(2t)(Churchill), wanders : ponders(Shelley), wander'd : ponder'd(3t), wanders : ponders(Byron), swallow : follow, wand : beyond(2t), wand : conn'd, wander : beyond-her, wandering : pondering(Keats),

[w] の ME/a/ に及ぼす円唇化の影響を示す ME/a/([w]__) : ME/ɔ/ は総計52個見出されている。既に Spenser に見出されているものの, 1600年以前に出生の詩人では稀であり, Southwell, F. Beaumont, Herrick, Butler, Hannay に1例, Spenser, Drayton, Lovelace, Brome に2例見出されているに過ぎない。勿論押韻率も極く低い。その他の詩人では見出されておらず, ME/a/([w]__) :

ME/ɔ/ は散発的に見出されているに過ぎない。Dobson (1968², § 194) によると, 16世紀の正音学者は誰も [w] の ME/a/ に及ぼす円唇化の影響を示しておらず, Robinson (1619) が初めて [w] __ C (C ≠ [g, k, ŋ]) で ME/a/=[a]>[ɔ] を示している。Newton (1660-2) は what に [ɒ] を, Cooper (1685) は was, watch に [ɒ] を示しているが, wan, wasp, quality では示していない。最初, 卑俗・方言的であったものが漸次, StE へと侵入し, 17世紀半ば以降確立していった。Dryden 以前では ME/a/([w]__):ME/ɔ/ は13個 (25%) 見出されているだけであるが, Dryden 以降になると ME/a/([w]__):ME/ɔ/ は40個 (75%) 見出され, 正音学者の陳述を裏付けるように1650年以降増える傾向にある。Wyld (1923, Rime, p.68) によると, 15世紀の Cely Papers には was の代わりに wosse, whose 等の綴字, Machyn (1550) には wash に代わる wosse が見出されている。しかし, Vernney Memoirs 以前にはこれ以上見つかっていない。Verney Memoirs (1639-96) は Daines, Cooper, 及び Dryden の時代に渡っており, この書簡集には wos (was), whot (what), wor (war), woshing (washing), wotching (watcing) 等のかんりの臨時綴字が見出されている。文学者達によって新しい発音が認められる時期, wo- という綴字が上流階級の人々によって用いられる時期, 及び wa- : ME/ɔ/ が見出される時期がほぼ一致している。

2. 7. ME/a/([w]__[r]C₀)

Dobson (1968², § 49) によると, この環境での [ɒ:] は Daines (1640) に初めて示されている。Kökeritz (1953) は ME/a/([w]__[r]C₀) が [ɔ:] になったことを示す脚韻の証拠を挙げていない。しかし, ME/a/([w]__[r]C₀) は EModE 期以降, ME/a/r, ME/ɛ/r, ME/e:/r, ME/a:/r, ME/ɛ:/r, ME/ɔ:/r, ME/ɔ:/r, ME/ai/r と押韻している。

2. 7. 1. ME/a/([w]__[r]C₀):ME/a/r (ME/a/r:ME/a/([w]__[r]C₀) で入力) 用例多数にて, B.Johnson までのものに留める。

affarre : warre, arme : warme, hert : wart, harme : warme(3t), marre : warre, regard : reward, regarde : reward, vnharde : reward(Wyatt), are : warre(2t), arre : warre, charme : warme, marre : warre, regarde : warde(Turberville), are : warre(3t), farre : warre(2t), harme : warme, regard : reward(2t), regarde : rewarde, skarres : warres, starres : warres(Gascoigne), arre : warre, farre : warre(3t), starre : warre(Spenser1), armd : swarnd, armd : warnd, arm : swarm, arre : warre(4t), carle : quarle, charmd : warnd, depart : quart, disarme : swarme, disarmed : warnd, farre : warre (6t), hard : reward, hard : ward, harnd : warnd, harme : swarme, hart : quart, marle : quarle, marre : warre, part : quart, part : swart, regard : reward(2t), regard : ward, starre : warre(2t) (Spenser2), bard : ward, farre : warre, gard : reward, hard : reward(4t), mard : reward(2t), regard : reward(3t) (Spenser3), alarme : warme, arr : warr, farne : warme, hard : adward, hard : ward, harme : warme, vnbard : ward(Spenser4), allarme : swarme, armed : swarmed, armed : warned, discarded :

warded, farre : warre, hard : reward, hard : ward, harmed : swarmed, harmed : warned, marre : warre, regard : reward, regard : ward(Spenser5), bard : ward, hard : ward(3t)(Spenser), marre : warre, are : warre, bar : warre, farre : warre, hard : reward(2t), hard : ward, marre : warre (2t), regard : reward, regardfull : rewardfull, starre : warre(Spenser-Minor), are : warr, are : warre, farr : warr, harme : warme, regard : reward, scarres : wares, starre : warre(Raleigh), are : warre, arme : swarme(3t), arme : warme, armed : swarmed, armed : warned, charmed : warned, harm : swarm, harmed : warned, heart : thwart, part : thwart, regarded : rewarded(2t)(Sidney), harme : warme, regarde : rewarde, regarde : warde, starres : warres(Lyly), arme : swarme(2t), armes : swarnes, bar : war, barr : warre, barre : war, barre : warre, far : warre, farre : warre(2t), harme : warme(2t), regarded : rewarded, starre : warre, starres : warres(Warner), harm : swarm, heart : wart, star : war(Southwell), afar : war(2t), are : war(14t), bar : war, far : war(8t), harm : warm, heart : thwart, mar : war(6t), marble : warble, mars : wars, part : thwart, regard : reward(3t), regarded : rewarded, star : war(Daniel), are : warre(3t), armes : swarnes(3t), armes : warmes(2t), barre : ware, card : ward, carre : warre, charmes : warmes(2t), farre : warre(10t), hard : reward, harme : warme, heart : thwart, marer : warre, part : thwart, parted : thwarted, regard : reward, regarded : rewarded, scarre : warre, skarr : warre, skarre : warre(4t), starre : warre(2t), starres : warres(3t)(Drayton), afar : war, are : war, bar : war, barr'd : reward, charmed : warned, disarm'd : warm'd, far : war, harm : warm, harmed : warned, regard : ward, scar : war, scars : wars, sharp : warp, starts : wars(Shakespeare), are : ware(3t), farre : warre(2t), harme : warme(2t), scarres : warres, starre : warre, starres : warres(Marlow), are : war, are : war(4t), art : overthwart, farre : warre(2t), harme : warme, hearst : overthwart, marr'd : ward, parts : overthwarts(Donne), are : warre(3t), barr'd : reward, barre : warre, charme : swarme, charme : warme, farre : warre, harpe : warpe, regard : reward, sharpe : warpe, stare : warre(Jonson),

ME/a/([w]__C₀) : ME/a/r は PE では視覚的には韻を踏むが、音声的には韻を踏まない [ɔ:] : [a:] の不完全韻である。しかし、この種の脚韻は、EModE 期以降、どの詩人にも一様に豊富に見出されている。これらの脚韻は押韻語が同じ発音であること ([w] の後の ME/a/ と独立位置の ME/a/ の発音が同じである) を示すだけで、それ以上のこと、つまり [w]__[r] の環境で ME/a/> [ɔ:] に変化したかに関しては何も示さない。

2. 7. 2. ME/a/([w]__C₀) : ME/ɛ/r

afterwarde : refarde, rewarded : deserued(Howard), warne : descerne(Goscoigne), ward : transfard(Spenser3), reward : *heard(Spenser5), reward : *heard(Spenser-Minor), †warre : referre(Warner), †warre : were(2t)(Drayton), reward : *heard, ward : *heard(Shakespeare), reward : *heard(Corbet), wardeine : *certaine(Browne), reward : *preferrd(Herbert), reward : *prefer'd

(Godolphin), †war : *her(Sherburne), thwarts : *deserts(Hall), reward : *heard(2t), reward : unheard, warning : discerning(Dryden2), reward : *heard, †war : *err(Dryden3), reward : *heard, reward : prefer'd(Dryden4), reward : *preferr'd(Wilmot), †war : *prefer(2t)(Duke), reward : *heard, †war : aver, †war : *err, †war : *her, †wars : years(Prior), †war : *her, ward : *heard(Granville), ward : *preferr'd(Rowe), reward : *heard(Diaper), reward : *desert(Byrom), warm : *learn, warn : *learn(2t)(Wilkie), sward : *unheard(Keats).

I] Dobson (1968², § 65)によると, [r] の前で ME/ε/ は14世紀に北部で, 15世紀に南部で ME/a/ に低母音化した。従って, これらの方言では ME/a/([w]__[r]_) : ME/ε/r は ME/a/r に依存する完全韻となる (ME/ε/r の ME/a/r 異形に依存するものには *印を付す)。ModE 期に入っても [εr], [ar] が並存していたが, 17世紀頃から [ar] が普通となる (clerk ~ clark, person ~ parson)。

II] Dobson (1968², § 66, § 68)によると, 次の諸語は ME で ME/ε/ が [r] の前で ME/a/ に変化したものであるが, 少なくとも EModE 期には ME/ε/ 異形が並存していた : far, farther, harvest, varnish, star, war (ME/a/ の ME/ε/ 異形に依存するものには †印を付す)。従って, II] の諸語と ME/ε/r の脚韻は ME/ε/r に依存する完全韻となる。

2. 7. 3. ME/a/([w]__[r]C₀) : ME/e:/r

war : rear, ward : rear'd, wars : spears(Dryden3), war : ear, war : fear(Sprat), war : fear, war : tear(Flatman), war : appear(King), war : appear(2t), war : hear(2t), war : here(2t), reward : rear'd, war : rear, war : spear(3t), wars : spears, wars : tears(Prior), war : here, war : sphere(Granville), wars : spheres(Pomfret), war : appear, war : here(Yalden), war : cheer(Rowe), war : appear, war : here, war : tear, wars : rears(Somerville), war : fear(Young), wars : appears(Gay), war : appear(2t), war : hear(Tickle), reward : appear'd(Pope), war : spear(Broome), war : appear(4t), war : ear, war : fear, war : rear(Pitt), war : ear(Boyse), war : peer(P. Whitehead), wars : fears(Johnson), wars : ears(W.Thompson), war : appear, war : fear(W. Whitehead), war : spear(3t)(Wilkie), war : ear(Smart), war : ear, war : fear(Shelley),

2. 7. 4. ME/a/([w]__[r]C₀) : ME/a:/r

reward : shar'd(Herrick), warres : spares(Herbert), war : tare(Cartwright), warre : dare(Crashaw), war : dare, war : stare(Cotton), war : care(6t), war : dare(2t), reward : declar'd, war : declare, war : spare(Dryden1), war : care(3t), war : declare, war : spare(Dryden2), war : bare(4t), war : care(26t), wars : cares(2t), war : dare(7t), war : declare(5t), wars : declares, reward : shar'd, war : share(9t)(Dryden3), war : care(Wilmot), reward : declar'd(Sheffield), war : care (Blackmore), war : declare(Duke), war : care(2t), war : spare(Garth), war : care(Stepney), war : care(3t), war : compare, wars : declares(2t), war : fare(King), war : care(14t), wars : cares(3t), war : compare(2t), war : dare(2t), war : declare(2t), wars : declares, war : share(2t)(Prior), war : care(Granville), wars :

glares, war : spare(Pomfret), war : care(3t), war : dare(2t), war : declare(3t), war : fare, reward : shar'd(2t), war : share(2t)(Wilkie), war : care, war : share, war : spare(Congreve), war : declare, wars : shares(Yalden), reward : far'd, war : care, war : declare, war : scare, war : share, war : apare, wars : cares(3t), wars : shares(Addison), war : care(2t), war : share, wars : cares(Rowe), war : care (2t)(Somerville), regard : compar'd(Philips), war : care(Hughes), war : dare (Parnell), war : care(3t) (Young), war : compare(Fenton), war : care(4t), war : compare, war : declare, war : share (Diaper), war : care(Gay), wars : dares, war : share(2t)(Tickle), war : care (3t), war : compare, war : glare(Pope), wars : dares(Broome), war : care(6t), war : declare, reward : shar'd, war : share, wars : shares(Pitt), war : care(2t), war : dare, war : fare, war : spare, reward : shar'd(West), war : care(4t), war : declare(Harte), war : spare(Boyse), war : care(Lyttleton), war : care, war : share(2t)(Johnson), war : share(W. Thompson), war : dare(P. Whitehead), war : care, war : dare, war : share, war : snare, war : spare(W. Whitehead), war : snare, war : spare(Gray), war : care(2t) (Cawthorn), war : glare(Smollet), war : care(3t), war : dare(2t), war : declare(3t), war : fare, reward : shar'd(2t), war : share(2t)(Wiekie), reward : shar'd(Blacklock), war : care(Fawekes), war : care(Smart), war : dare(T. Warton), war : care(Smart), war : dare(T. Warton), war : care, war : dare(2t)(Mason), war : care(Churchill), war : glare(Falconer), war : care, warre : care, warre : dare (Mickle), reward : far'd(Beattie), war : glare(Lovibond), wars : cares(Jones), war : dare(Logan), war : stare(Chatterton), reward : bared, reward : shared(Wordsworth),

2. 7. 5. ME/a/ ([w]__ [r] C₀) : ME/ε:/r

war : bear(Garth), war : bear, warre : beare, warre : weare(Cambridge), war : there(Dryden4), war : bear(2t)(Stepney), war : bear(4t), wars : bears, war : tear, war : there(Prior), war : bear(Granville), war : forbear(Congreve), war : bear, war : there(Yalden), war : bear, war : forbear(3t)(Addison), war : bear(2t)(Somerville), war : there(Young), war : bear, wars : bears(Tickle), war : bear, war : tear(Pope), war : bear(Broome), war : bear, wars : bears(Pitt), war : wear(P. Whitehead), war : bear (Wilkie), war : bear(Mason), war : bear(Logan), war : there(W. Whitehead),

2. 7. 6. ME/a/ ([w]__ [r] C₀) : ME/ai/r

war : despair(Denham), war : air(Sprat), war : fair(Halifax), war : air(Ayres), war : air(Shadwell), war : air(King), war : air(4t), war : despair(2t), war : fair(2t), war : heir, war : prayer, war : repair, wars : heirs(Prior), wars : prayers, wars : repairs(Granville), war : fair(3t), war : repair(Yalden), war : despair(2t)(Rowe), war : air(2t), war : despair, war : fair, war : prayer(Adison), war : air, war : despair(Somerville), war : fair(2t)(Dryden2), war : air, war : despair(3t), war : hair, war : pray'r (2t), war : repair(Dryden3), war : fair, war : repair(2t)(Dryden4), war : air(Fenton), war : fair (Halifax), war : air(Ayres), war : air(King), war : air(3t), war : despair(2t), war : fair(2t), war : heir, war : prayer, war :

repair, wars : heirs(Prior), war : prayer, wars : repairs(Granville), war : fair(3t), war : repair(Yalden), war : air(2t), war : despair, war : fair, war : prayer(Addison), war : despair (2t) (Rowe), war : air, war : despair(Somerville), war : air(Fenton), war : pair, wars : may'rs(Pope), war : air(3t), war : despair, war : hair(Broome), war : air(Green), war : despair(3t)(Pitt), war : pair (West), war : despair(2t), war : fair(Boyse), war : fair(P. Whitehead), war : air, war : fair (Johnson), war : repair(Thompson), war : air(2t), war : despair, war : fair, war : prayer(W. Whitehead), war : air(J. G. Cooper), war : pray'r(Smart), war : air, war : fair(Johnson), war : repair (W.Thompson), war : air (2t), war : despair, war : fair, war : prayer(W. Whitehead), war : air(J. W. Cooper), war : pray'r (Smart), warre : air(Mickle).

ME/a/([w]__[r]C₀) : ME/e:/r は PE では [ɔ:] : [iə] の不完全韻であるが⁸, 1600年以降散見されている。Dobson (1968², § 42, § 43 Note 3) によると, Cocker の同音語表は war に ME/a:/ 異形が並存し, OED は war に ME/a:/ 異形(4-5ware)が並存していたことを示しているので, ME/a/([w]__[r]C₀) : ME/e:/r は ME/a:/r : ME/e:/r となる。ME/a/([w]__[r]C₀) : ME/a:/r, ME/ε:/r, ME/ai/r は PE では [ɔ:] : [εə] の不完全韻であるが⁹, 1600年以降見出されている。Dobson (§ 6, § 42, § 43 Note3, § 49) によると, war, reward には ME/a:/ 異形が並存していた。従って, ME/a/([w]__[r]C₀) : ME/a:/r, ME/ε:/r, ME/ai/r はそれぞれ war, reward の ME/a:/ 異形に依存する ME/a:/r : ME/a:/, ME/ε:/r, ME/ai/r となる。

2. 7. 7. ME/a/([w]__[r]C₀) : ME/ɔ:/r

war : before(Shadwell), war : before(Duke), warn : born(Swift), war : more(Savage), war : shore(W. Whitehead), war : heretofore, war : swore(Byron),

2. 7. 8. ME/a/([w]__[r]C₀) : ME/ɔ:/r

swarmd : deformd, warmd : deformd(Spenser2), warm'd : perform'd(Daniel), warning : morning(P. Fletcher), warmer : former(Herrick), warn'd : scorn'd(Bosworth), downward : sword, quarters : fortress, war : for(4t), warders : orders(Butler), warms : storms(Crashaw), reward : accord(Lovelace), quart : for't, quart : sport, reward : lord(Byrome), dart : short, harm : storm(3t) (Phillips), warm : form(Cotton), warm : form, warm : storm, warm'd : form'd(Dryden2), warm : form, warm'd : form'd(Dryden4), warn'd : adorn'd, warn'd : perform'd(Shadwell), warm : perform(Otway), swarm : form, warm'd : form'd(Blackmore), reward : record, warning : morning(Prior), reward : record(Granville), quart : port, quarter : mortar, quarter : shorter, swarm : form, warm'd : perform'd, warm-her : reform-her, warms : informs, warn : corn, warning : morning(3t)(Swift), warm : form, warm : perform, warms : forms (2t)(Watts), warm'd : perform'd(Somerville), swarms : storms, warm : storm(6t), warm'd : storm'd(Young), unwarm'd : form'd, warm : form(Pope), war : for, warm : form(Green), warm : form(2t), warm : orm, warm : reform, warning : morning(Cambridge), warms : forms(Savage), warm : form, warm : storm(Jenyns), swarms : forms, warm : form(2t),

warm : inform, warm : storm(2t), warm'd : form'd(5t), warm'd : inform'd(3t), warms : forms(3t) (Brooke), warm : form(Harte), reward : lord (P.Whitehead), warm : form, warm'd : inform'd, warning : morning(Moore), warm : form(2t) (Shenston), warm'd : form'd(Jago), swarms : forms, warm : form(3t), warm'd : form'd(3t), warms : deforms, warms : forms(W. Whitehead), awarding : according(J. G. Cooper), swarms : forms, warm : storm, warning : morning(Smart), warm : form(T. Warton), warm : storm(Cunningham), warm : form (Scott), reward : lord, warm : form(2t), warm : storm(3t), warm'd : inform'd(2t), warms : forms (2t)(Churchill), award : lord, warm : form(2t), warm'd : form'd, warm'd : inform'd, warn'd : scorn'd (Cowper), warm : form(Falconer), warm : form(Langhorne), warm : form(3t), warm : storm (3t), warm'd : deform'd(2t), warms : storms(Chatterton), warmed : transformed(Wordsworth), war : for, warms : form(2t), warn : morn(Byron), warm : form(2t), warms : transforms, warning : scorning (Shelley), war : for, warm : form(2t), warning : morning(Byron), sward : lord, wards : lords, warm : form(2t)(Keats),

2. 7. 9. ME/a/([w]__[r]C₀) : ME/au/

quarters : daughters(W. Whitehead),

ME/a/([w]__[r]C₀) : ME/ɔ:/r, ME/a/([w]__[r]C₀) : ME/ɔ:/r は ME/a/ が [w]__[r]C₀ で [ɔ:] になったことを示す貴重な脚韻であるが、前者は脚韻総数が少ないこともあって、Shadwell(?1642-92)に初めて1例見出され、それ以降も Duke (1), Swift (1), Savage (1) W. Whitehead (1), Byron (2) に ()内の数字で示されているだけ見出されているに過ぎない。後者は総計161個見出され、Spenserに2例見出されているものの、1600年以前に出生の詩人で、Daniel, P. Fletcherに1例見出されているに過ぎず、他の詩人では見出されていない。Dobson (1968², §49)によると、Daines (1640)が初めて ME/a/ が [w]__[r]C₀ で [ɔ:] になったことを示し、彼は ward, warm, swarm, warn, warn, wharf, dwarf, swarve, warp, wart, quart, swart, thwar で [ɔ:] の証拠を提示している。Coles (1674)は保守的で ward, dwarf, wharf で [ɔ:] を示しているが、warm, swarm, warn, wart, quart, thwartでは円唇化だけを示し、warp, warbleでは円唇化も長母音化も示していない。Cooper (1685)は ward, warden, warm で [ɔ:] を示している。Dryden 以前では ME/a/([w]__[r]C₀) : ME/ɔ:/r は19個(11.8%)見出されているだけだが、Dryden以降になると ME/a/([w]__[r]C₀) : ME/ɔ:/r は142個(88.2%)見出され、正音学者の陳述を裏付けるように増える傾向にある。脚韻の証拠からは、ME/a/ が [w]__ で [ɔ] になったことを示す ME/a/([w]__) : ME/ɔ:/r と ME/a/([w]__[r]) : ME/ɔ:/r は EModE 期に見出されるものの、一般的になるのは正音学者の証拠とほぼ同じ時期の1650年頃であり、[w] が ME/a/ を円唇化させたと同時に [r] が長母音化させたことになる。Dobson (1968², §28)によると、ME/a/([w]__[r]) : ME/au/ (quarters : daughters) は daughter に ME/a/ 異形が並存していた証拠があり、ME/a/ が [w]__[r]C₀ で [ɔ:] になった確証にはならない。

2. 8. ME /a/ ([w]__[f,s,θ])

Dobson (1968², §4) によると, Coles (1674) と WSC-RS (1695) は単語 was だけに [v:] を示しているものの, 他の正音学者は誰もいつ ME/a/ が [w]__[f,s,θ] で [v:] になったかを示していない。Cooper (1685) は wasp に長母音化した [a:] のみを示している。wasp, swath のように, この音声環境を満たす語が少ないので, 正音学者の証拠がないのであって, [w]__[r] のそれと同様に1650年頃には ME/a/([w]__[f, s, θ]) も [v:] になったと想定してよいだろう。

2. 8. 1. [w]__[f,s,θ] : ME/ɔ/

was : cross, was : losse(Drayton), was : dross, was : loss(Prior), was : loss(Congreve),

17世紀半ばまでの詩人は wand : hand, reward : hard といった脚韻を日常の発音から押韻しなくなっただけでも, 詩的伝統により, 使用している。一方, was : cross, ware : sore, wrath : forth のような脚韻を, それらが今日同様, 当時においても完全であったにも拘わらず, 綴字が違うという理由で避けている。

2. 8. 2. ME/a/ (>長母音化) : ME/a:/

wrath : scath(Spenser-Minor), wrath : scath(Spenser-1), wrath : hat'th, wrath : scath(Spenser-2),
wrath : scath(Spenser-5), wrath : scathe(Byron).

ME/a/ (>長母音化) : ME/a:/ は PE では [ɔ:] : [ei] の不完全韻であるが, EModE 期以降散見されている。ME/a/ (>長母音化) : ME/a:/ は wrath の ME/a:/ 異形に依存する完全韻である。Dobson (1968², 6) によると, wrath は OE 期に二つの異形 (wraqu, wraqqu) が並存し, 前者から wrathe, 後者から wrath が生じた。Levins, Hodges は wrath に ME/a:/ 異形が, Gil は ME/a/ 異形が並存していたことを示している。PE 音 [ɔ:] は w[r]__[θ] という環境で長母音化されたことに由来する。wrath は随意的に長母音化を起こし, 今日の S t E には, 長母音化を起こした [ɔ:] と, 起こさない [ɔ] が並存している。しかし, [ɔ] の方が普通である。

2. 8. 3. ME/a/ (>長母音化) : ME/a/(__[f, θ])

wrath : path(Spenser1), wrath : path(2t)(Spenser3), wrath : wrath(Spenser5), wrath : path(4t),
wrath : path(3t)(Drayton), wrath : lath(Shakespeare), wrath : path(Carew), wrath : path(2t)
(Whiting), water : after(2t), water : laughter(Swift), Wrath : Bath (Congreve), water : after
(Somerville), wrath : Bath(Gay), wrath : path(Byrom), wrath : path(6t)(Byron), wrath :
path(Keasts),

PE では [ɔ:] : [a:] の不完全韻であるが, wrath には ME/a/ 異形が並存していたので, ME/a/ (>長母音化) : ME/a:/ は ME/a/ (>長母音化) を持つ語の ME/a/ に依存する完全韻である。

2. 8. 4. ME/a/ (>長母音化) : ME/ɔ/r

wrath : forth(Yalden), wrath : north(Watts), wrath : forth(Crabbe), wrath : forth, water :
shorter(Keats).

ME/a/ (>長母音化) : ME/ɔ/r は PE では [ɔ:] に依存する完全韻であるが、17世紀後半以降稀にしか見出されていない。これはこれらの脚韻が韻としては完全なものであっても、目映りが悪く、古来の伝統に悖ることになるのなら、詩人は伝統に即した詩作を選んだからである。筆者は EModE 期に ME/ɔ/r と ME/ɔ:/r (abhor : more, corn : sworn, horse : coarse), ME/u:/r (horse : course, short : court, short : court) が見出されることにより、ME/ɔ/r は EModE 期には [ɔ:] になっていたと想定している。Dobson (1968², § 53 Note 7) によると、Milton は wrath を wrauth と綴っている。更に Hodges は近似音表で、Coles は不注意な Eng-Lat. Dic. で wroth を wrath と対にさせており、ME/a/ が [wr]__[f, s, θ] で [ɔ:] になった証拠を提示している。従って、ME/a/ (>長母音化) : ME/ɔ/r は17世紀後半に ME/a/ が [wr]__[f, s, θ] の環境で、後母音化し、更に長母音化した数少ない例と見なしてよいだろう。

2. 8. 5. ME/a/ (>長母音化) : ME/ai/

wrath : faith(11t)(Stirling), wrath : faith(Drummond), wrath : faith(King), wrath : faith(Chalkhill), wrath : faith(Butler), wrath : faith(16t)(Byron),

ME/a/ (>長母音化) : ME/ai/ は PE では [ɔ:] : [ei] の不完全韻である。しかし、EModE 期以降稀ではあるが、見出されている。Dobson (1968², § 6) によると、wrath には ME/a:/ 異形が並存していたので、ME/a/ (長母音化) : ME/ai/ は ME/a:/ : ME/ai/ の完全韻となる。

2. 9.

2. 9. 1. father

Dobson (1968², § 6) によると、Levins, Smith, Bullokar は father に ME/a/, Robinson (1619), Hodges (1643) は ME/a:/ に、Hart, Gil は ME/a/, ME/a:/ の両形を示している。father は EModE 期以降 1) ME/a/ を持つ語 (father, gather, lather), 2) ME/a:/ を持つ語 (father : labour), 3) ME/i/ を持つ語 (father : hither) と押韻している。1) は ME/a/ に、2) は ME/a:/ を持つ語の ME/a/ 異形に、3) は hither の ME/ɛ/ 異形に依存する脚韻となる。我々は father : hither=ME/a/ : ME/ɛ/= [æ] : [ɛ] の類韻ではなく、ME/a/ の方言音 [e] (father, gather の ME/ɛ/ 異形 (1-3 fether, 6 gether < OE gaderian) と hither の ME/ɛ/ 異形) に依存する完全韻であると考えている (Dobson, 1968², § 80)。Kökeritz (1953, p. 169) は Shakespeare に見出される father : hither を、hither は通常 /ɛ/ と発音されているところから、[e:] : [e] に依存するものと見なし、Shakespeare は father に少なくとも二つの発音 (一つは [a:] 又は [æ:], もう一つは今日尚 Warwickshire で行われている [e:]) を知っていたと想定している。

2. 9. 2. water

Dobson (1968², § 6, 54) によると、Levins, Gil は water に ME/a/, /a:/ の両形を、Hodges は ME/a:/ を記録しているので、water : ME/a:/, ME/a/ は water=[ɔ:] の確証にはならない。water の [ɔ:]

は、ME/a/ の [a] > [a:] より少し早い時期（1640年）に、Robinson（1617）に初めて記録されている。

water : ME/a/

water : nature(3t)(Butler), water : nature(Hannay), water : nature(Hughes), water : nature(Fenton), water : Nature(Gay), water : nature(Wilkie), water : nature(Cowper),

water : ME/a/

water : after(Drayton), water : after(Warner), water : after(2t), water : laughter(Swift), water : after (Somerville),

III. 結論

ME/a/ の発達過程を考察するのに関係ある証拠の実状は II . で見たようなものである。これらの証拠を踏まえると、ME/a/ の発達過程の最も蓋然性の高い推論は次のようなものであろう。

i) ME/a/ は ME/ε/, ME/u/, ME/ɔ/, ME/i/ とは融合しなかった。EModE 期の一時期、ME/a/ : ME/ε/, ME/u/, ME/ɔ/, ME/i/ が散見されるが、その多くは方言形・異形に依存するものである。

ii) 正音学者の証拠から1650年頃 ME/a/ = [a] > [æ] になった。ME/a/ : ME/ε/ は Scotland, 北・西部, Kent 出身者に見出されているが、その多くは方言音 [ɛ] 又は [e] に依存するものである。

iii) [r] の前では、1650年頃、ME/a/ は [a:] となった。ME/a/ : ME/a:/ は EModE 期から見出されるものの、その多くは ME/a:/ の ME/a/ 異形に依存するものであるが、1650年以降、どの詩人にも見出されている。脚韻の証拠は1650年頃、ME/a/r は ME/a:/r となったという正音学者の証拠とほぼ一致する。

iv) [f, s, θ] の前では、1650年頃、ME/a/ は [a:] となった。ME/a/ : ME/a:/ は EModE 期から見出されるものの、その多くは ME/a:/ の ME/a/ 異形に依存するものであるが、1650年以降、どの詩人にも見出されている。脚韻の証拠は1650年頃、ME/a/(__[f, s, θ]) は [a:] になったという正音学者の証拠とほぼ一致する。

v) [w]__ の環境で ME/a/ > [ɔ] の脚韻上の証拠は、既に Spenser に見出されるものの、比較的一般的になるのは1650年以降であり、正音学者の証拠とほぼ一致する。

vi) [w]__[r] の環境で ME/a/ > [ɔ:] の脚韻上の証拠は、既に Spenser に見出されるものの、比較的一般的になるのは1650年以降であり、正音学者の証拠とほぼ一致する。

vii) [w]__[f, s, θ] の環境で ME/a/ > [ɔ:] の正音学者の証拠は存在しない。

VIII) father, water の ME/a/ > [a:], [ɔ:] の正音学者の証拠は1650年頃から始まる。図示すると

	1600年	1650年
自由位置 (man)	[a]	[æ]
__[r]C ₀ (car)	[a]	[a:]
__[f,s,θ](fast)	[a]	[a:]
[w]__(want)	[a]	[ɔ]
[w]__[r]C ₀ (warm)	[a]	[ɔ:]
[w]__[f,s,θ](swath)	[a]	[ɔ:]
father	[a]	[a:]
water	[a]	[ɔ:]

注

1. 単母音 (ME/a/), 長母音 (ME/a:/), 二重母音 (ME/ai/) の中では単母音が一番その発音が安定している。ME/a/ が [a] の時, 長母音 ME/a:/ は調音時間が長く, それだけ発音がぶれることになり, 単母音 (ME/a/) より発音が変化しやすい。二重母音 (ME/ai/) は第2要素の i の第1要素に与える同化作用のため長母音 (ME/a:/) より早く発音が変わるといってよい。ME/a/ > [æ] は1653年の Wallis に, ME/a:/ (= [a:] > [æ:]) > [ɛ:] は1621年の Robinson に, ME/ai/ (= [ai] > [æi] > [ei]) > [ɛ:] は1551年の Hart に初めて記録されている。
2. 12世紀~13世紀前半にかけて二音節語の開音節の位置にある母音 [a, e, i, o, u] がそれぞれ [a:, ɛ:, ɔ:, e:, o:] に変化したことを開音節長音化 (opensyllable lengthening) という。[a] > [a:] だけは同じ舌の位置の長母音に代わったが, 他の [e, o, i, u] は一段低い長母音へと推移した ([i] > [e] > [e:], [e] > [ɛ] > [ɛ:], [u] > [o] > [o:], [o] > [ɔ] > [ɔ:]). 但し, 例外が多く, EModE 期には長・短両形が生ずることに繋がる。
3. gather では明らかに長音化は生じてないが, father, lather, rather の PE 音 [ɑ:] に関しては次の諸説が行われている。
 - 1) a) OE fæder > OSL > ME/a:/ (> [ei]), b) 屈折形 fadres > 閉音節であるため長音化せず > ME fäder が並存し, 後者が音質, 前者が音量を提供した折衷形 (Jespersen, 1909, § 10.67)。
 - 2) __[dr] の環境でも __ [f,s,θ] と同様, 長音化が生じた (Ekwall, 1975, § 47)。
 - 3) bath, path 等 [θ] に終わる語が頻度の高い father, lather に影響した (Prins, 1972, 4.13.2.)。
4. water の PE 音 [ɑ:] に関しては次の諸説が行われている。
 - a) OE wæter > ME water > OSL > ME/a:/ (> [ei]), b) ME wattere > EModE [ɔ] が並存し, 後者が音質, 前者が音量を提供した折衷形である (Jespersen, 1909, § 10.67; Prins, 1972, § 75)。
 - c) [w] が ME/a/ を円唇化したと同時に長音化した結果である (Dobson, 19682, § 53.7; Ekwall, 1975, p.52)。

参考文献

- Cercignani, C. 1981. *Shakespeare Works and Elizabethan Pronunciation*. Oxford: Clarendon.
- Dobson, E. J. 1968². *English Pronunciation 1500-1700*. 2 Vols. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Ekwall, E. 1975. *A History of Modern English Sound and Morphology*. Oxford: Basil Blackwell.
- 平郡秀信. 2010. 『大母音推移-長母音の場合-』. 一誠社.
- _____. 2011. 『大母音推移-単母音の場合-』. 一誠社.
- _____. 2011. 『大母音推移-二重母音の場合-』. 一誠社.
- _____. 2012. 『大母音推移』. 一誠社.
- _____. 2015. 『スペンサーの発音』. 一誠社.
- Jespersen, O. 1909. *A modern English Grammar. Part I*. London: George Allen & Unwin.
- Kökeritz, H. 1953. *Shakespeare's Pronunciation*. New Haven & London: Yale Univ. Press.
- Wolfe, P. M. 1972. *Linguistic Change and the Great Vowel Shift in English*. Berkeley: Univ. of California Press.

Wyld, H. C. 1936³. *A History of Modern Colloquial English*. Oxford: Basil Blackwell.

Zachrisson, R. E. *The English Pronunciation at Shakespeare's Time as taught by William Bullokar*. Uppsala: Almqvist & Wiksell.

